
闇鳥のトビカタ

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇鳥のトビカタ

【Nコード】

N5589C

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

チームを組んでるロットとルーに引きずられ、ギルドの仕事に精を出す日々。相も変わらず人の話を聞かないこいつらは、またしても「遺跡調査」なんていうケツタイな仕事を取ってきたわけだが…。

プロローグ

「ねえ、自由って……何だと思う？」

彼女は、そんなことを聞いてきた。

俺はスプーンをつまんだ右手を止める。

町外れの食堂の窓際の一角。日も沈みかけている夕暮れ。夕飯時なんだから当たり前と言えば当たり前だが、店内はなかなか混雑していて、周りは少々騒がしい。店員があっちこっちへ慌ただしく駆けて行く。

そんな喧騒の中、互いの夕飯をはさんで、俺と彼女は向かい合っている。

『彼女』なんて呼んではいるが、別にこれは恋人を意味する使用方法なんかではなく、俺にとって彼女は友達ですらない知り合いなだけで、二人で夕飯を取っているのも偶然ここで会ったから相席しただけであり、ましてデートとかそんな類のものではない。そもそも彼女と面と向かって話したことだって、今までそれほどなかったんだ。

俺が彼女の——つまり、ワイトホール——質問に答えあぐねていると、

「言い方を……変えるわ。……自由って言うのは……何かを……持つていることだと……思う？ ……それとも……何も持たないことだと……思う？」

彼女は静かに言葉を続けた。

「えらく意味深な質問だなあ……」

俺は嘆息しながら答える。

「そんな難しいこと、考えたこともないね。哲学者や政治家じゃあるまいし、考える必要もなかった。そもそも、そんなことを何で俺に聞くんだ？ ロットにでも聞けば、それなりに格調高い答えが聞

けるだろうに。……まああいつは、考えなしなことを考えなしだつていう自覚なしに言うからなあ。うゝん……じゃあルーはどうだ？ ポジティブな答えを期待してるんなら、あいつが適任だろう。あいつの発言には、根拠がないのが玉に瑕だな。……そうだ、ウエリイは？ あいつは確固たる信念みたいなのを持ってそうじゃないか。独りよがりっぽいけどね。ギーンは……真面目に考えてくれそうだけど、答えが出なくて、二人でどつぼにはまっていくのが目に見えてるな」

俺が知り合いを羅列していくと、彼女は静かに首を振った。

「あなたの考えを……聞きたいのよ」

波の立っていない水面のような瞳で、じつと俺を見据えている。

「だから、何で俺なんだ？」

「私とあなたは……似てるから」

俺とこいつが——似てる？

口にこそ出さなかったが、「どこが？」と咄嗟に思ってしまった。よく言えば物静か、悪く言えば暗鬱な彼女と似ていると言われるのは、こっちとしては正直おもしろくないことである。彼女に対して失礼な気もするので、面と向かつては言えないけどさ。

俺は、彼女の発言を肯定するでもなく否定するでもなく、

「うゝん。自由……自由ねえ……」

腕を組んで、首を傾げながら、

「選ぶことだろ？」

第一話

人々が行き交う大通りから、少し奥に入った路地裏。

俺はレンガ造りの壁にもたれ掛かりながら、通行人の目に付かないように身を潜めている。周囲には人っ子一人おらず、俺の背後にはポリバケツが並んでるだけだ。少し生臭い。恐らく喫茶店の食事の残飯が詰め込まれているんだろう。

ドンツ、とプラスチックが叩かれる音がした。

振り返ってみたが、黒い猫がいるだけ。ゴミ箱の上で俺を見て、ウーッと唸っている。猫と食事の奪い合いをする余裕も意味もないので、とりあえず放っておく。

ふいに、右手に握っているトランシーバーから、

『ターゲットが来ました、どうぞ』

と、ノイズ入りの音声が届いた。聞き飽きるほど聞き慣れた、甲高い女の子の声。ルーだ。

俺はレシーバーを口元に持っていて、

「……どの辺り？」

『現在ウェンズ銀行の前を通過中です、どうぞ』

「オーケー」

俺は答えながら、帽子のつばを少し上げつつ壁際から大通りを覗いた。

平行に並び建つ、レンガ造りの建物群。

喫茶店、本屋、銀行、服屋、靴屋、レストラン、酒場が建ち並んでいる。平日だっていうのに人通りは結構多い。昼飯時だからだろう。老若男女が、ある者は談笑しながら、ある者は無表情で通り過ぎていく。

その人ごみを覗き込んで目を凝らすと、百メートル程先にパーマがかかった金髪、赤いワンピースでふわふわ歩いてる、見た目二十代前半くらいの女性を発見した。昨日写真で見た人物。ターゲッ

トだ。

「……ロットは？ 準備できてるか？」

俺はこの作戦のもう一人の主要人物が気になり、トランシーバーに再度口を近づけて問いかけてみた。

『スタンバイオーケーだ、どうぞ』

今度はトランシーバーから男の声が答えてくる。

……と言うか、いつもこいつも「どうぞどうぞ」ってうるさいな。兵隊じゃあるまいし、言う必要は全くないだろ？ ふざけてやってるならまだ愛嬌があるが、こいつらは大真面目にやってるもんだからタチが悪い。

どうしたもんかと嘆息していると、トランシーバーがジジツといって、またルーの声が聞こえてきた。

『じゃあ、ダルク、ロット。ターゲットが本屋の前に来たら、あたしが合図しますから。二人ともこの司令官の声に合わせて行動を開始するですよ、どうぞ』

……こいつ、一人称を司令官にしゃがった。

間髪いれず、トランシーバーからロットの声で、

『了解した、どうぞ』

……素直に答えてるし。

はあ、とため息をこぼして、俺は屋根の隙間から覗く空を見上げた。

……何でまた、こいつらはこんな面倒くさい仕事を引き受けたんだ？ 別に報酬も大したことないのに。今回はこの司令官にもっとちゃんと進言しよう。「仕事を選べ」と。

一体どんな言い方をすればこいつらはちゃんと分かってくれるのかと、脳内であれこれシミュレーションしていると、

『ミッシヨンスター！』

いきなり、トランシーバーから司令官ルーの号令。

俺は慌てて路地裏から大通りへ出た。

顔を上げて前方を見ると、例の赤いワンピースの女性が本屋の前

を通過している。別段俺の方を気にしている様子はない。鼻歌を歌ってそうな、にやかな表情でぶらぶら歩いている。

俺は帽子のつばを深くし、そっちの方へと向かっていった。

ターゲットとの距離を測りつつ、それでもターゲットを直視することなく、他の通行人をかわしながら進んでいく。そしてターゲットの二、三步手前の位置に来たとき、俺は故意にターゲットの前に一歩足を踏み込んだ。そしてさらにもう一歩踏み出すと、当然の如く俺とターゲットはぶつかる。

「キャッ」

と言う声がして、ドシンとしりもちをつく音。俺も反動で後ろに倒れそうになったが、何とか踏ん張った。

俺は帽子のツバを上げ、その女性を見下ろす。遠くから見ているも分かったが、結構な美人さんだ。整った顔立ち、白い肌、つやのある髪。

「いたた」

とお尻をさすっている彼女をしばらく見ていると、胸ポケットのトランシーバーから

『こらっ、ダルク。早く台詞言いなさいっ』

とヒソヒソ声で怒られたので、俺は慌ててターゲットを睨みつけながら、

「おうおう、ねえちゃん。どこに目えつけて歩いてんだあ？」

と、昨日司令官殿に覚えさせられたセリフを口上に並べた。……

うん。我ながら迫真の演技だ。

「……ご、ごめんなさい」

眉をハの字にして、俺を見上げながら謝るターゲット。困った顔も魅力的……とか思ってたられないので、俺は台詞を続ける。

「ごめんで済んだら自警団はいらねえんだよ！」

俺は一歩踏み出し、彼女の腕を強引に引っ張った。「キャッ」と言う彼女。

「侘び代わりに、お茶でも付き合ってもらおうか」

俺は台本に書いてあった通り、思いつく限りの気持ち悪い笑顔を作る。……というか『気持ち悪い笑顔』って具体的にどういう笑顔だよ？ わかりにくい台本書きやがって。

俺に腕をつかまれ、心底怯えたような顔をしたターゲットは、「ご、ごめんなさい。私、ちよつとこれから行く所があつて……」このパターンも練習済み。というか、練習させられた。ルー司令官殿に。

俺は演技を継続して、

「ちよつとくらいいいじゃねえか」

へっへっへつという、我ながら実に頭の悪そうな笑い方をしながら（台本通り）、彼女の腕を引いていった——と、

「待ちな」

俺の背後で声がした。さっきトランシーバーから聞こえてた男の声だ。ただし、今回はノイズが混じっていない。トランシーバー越しじゃないからだ。

振り返るとそこには、大きな剣を背中に携えた赤い短髪の少年が、自信ありげな表情で立っていた。むかつくほど見慣れた顔、ロットだ。

しかし俺は、さも初めて会ったかのようにいぶかしんだ顔をしつつ（台本通り）、

「誰だ、てめえは？」

俺の問いかけに、ロットはふっふつと笑いながら、俺の手元に向かって人差し指をつき立てた。

「その手を離せ」

紺色のマントを風にたなびかせ、俺を睨みつけながら静かに言うてくる。

俺はターゲットの腕から手を離しながら、

「何だ、お前は？」

「……ただのお節介さ」

ふっ、とニヒルに笑うロット。どうやらこいつは心の奥底からヒーローになりきってるようで、もはや演技に見えないほどのアクションである。この上ない自然体。……いやまあ、逆にこいつは演技でもなくこういうことをするせいで、俺の日々の悩みは絶えないんだろうが。

と、危うく人生反省会に飛んでいきそうになった意識を取り戻しつつ、俺は腰から短剣を取り出しながら、

「俺に歯向かおうってのか？ え？ 痛い目に遭いたいのか？ おう！」

精一杯のドスの利いた声を出す。……少し喉が痛い。

咳き込みそうなのを我慢して、俺はロットに向かって短剣を構えた。

しかし、ロットはまるで動じずにそのナイフの剣先を少しの間眺め（もちろんこれも台本通りなので当然だが）、またもふっと笑った。そして思わせぶりの声音で、

「……痛い目に逢うのは、どっちだろうな」

そう言いながら、背中の中の大剣を取り出す。ロットの身長くらいいある大剣だ。黒い持ち手と銀色に輝く刀身。ツバには龍の紋様。刃渡りは少し赤みがかっている。

「わあ……」

その大剣の輝きに、さっきから地面にへたり込んだままのターゲットが感嘆の声を上げた。

……まあ、その気持ちも分かる。市販品の剣なんかより、装飾といい刀身といい実に芸術的なものだ。俺も「何度見ても大した剣だな」と思ってしまう。

ターゲットのリアクションに反応してロットは首だけ振り返り、口を半開きにしたままのターゲットにニッと笑顔を向けた。そして再度表情を戻して、俺の方を見る。

俺はその視線を受け、

「な、何だよ！ 別に剣がでかけりや強いってもんじゃないだろ！」
と台本通りそう叫び、そしてこれまた台本通りに短剣を振りかざしてロットに向かって駆け出した。

えーと確か、俺が切り込んだ瞬間にロットは俺の短剣を弾き飛ばし、俺の鼻先に剣をかざす。そしたら俺は「覚えてろ！」と叫んで逃げ出す、という予定のはずだが……。

そんなことを反芻しながら、俺がロットにあた五、六歩というところまで迫ったとき、いきなりロットは剣を一振りブンツと振ったと同時に――

――刀身が炎を纏った。

「お、おい！」

俺は慌ててブレーキをかけて立ち止まる。

「ちょっと待て！ な、何で炎……。そんなの、だ、台本には……」
しかしロットは、むしろ俺の驚愕を楽しむようにふっふっふっと笑い、赤々と燃える剣をチャキリと振りかざしてきた。

「うわゝ。すごい」

目の端で、ターゲットが呑気に驚いてる。

「ちょ……ま……待て」

俺は後ずさりつつ手の平をロットに向け、何とか静止しようとした。が、ロットはそれに耳を貸す様子もなく、一步二歩と近づいてくる。そしてちらつと再度ターゲットの方を見た後、また俺に向き直り、剣を大きく振りかぶって――勢い良く振り下ろしてきた。

「火炎斬鉄！」

「うわっ」

俺は横に跳び、かろうじてこの攻撃をかわす。足元を見ると、ズボンのすそに焦げ痕。こいつ、本気なのかよ。

と、俺が体勢を立て直す暇もなく、

「たーっ！」

ロツトはなおも二撃目を繰り出してくる。

俺は急いでしゃがんでかわした。ぶんつ、と俺の頭上で風のうなり声。持ってかれた髪の毛が数本、宙を舞う。

俺はすぐさま後方に跳び、ロツトと距離をとった。そしてロツトに「いくらターゲツトが美人さんだからって、お前、そんな良い所見せようと張り切らなくても——」

「問答無用！」

叫びながらロツトは俺に突っ込んできて、三撃目を加えてくる。

俺は後ろに跳んでこれをかわした。そしてロツトと数メートル離れた位置にスタンツと着地し、

「バカ野郎！ お前、ホント、いい加減に——」

と言いかけて、背中から焦げ臭いがしてるのに気付いた。恐る恐る脇から背中を見てみると――

「――ゲツ」

燃えてる。服が。メラメラと。

俺は慌てて後ろに駆け出した。

「あちつ、あちつ、水！ 水！ どこだ！」

遠くでロツトの

「悪は去った」

とか言うせりふが聞こえたが、気にしてる場合じゃない。

俺は空き缶を蹴っ飛ばし、ゴミ箱につまづき、犬に吼えられながら走り続けた。

三十秒くらい走ってようやく井戸を見つけ、近くにあったバケツを頭の上で逆さにする。ザバーツ、と勢いよく落ちてくる水。……

……冷たい。

ジュツといって、炎はようやく消えた。

小さな水溜りの中、空っぽのバケツを放り投げ、青々とした空を見上げながら、俺はため息を一つこぼし、

「――あんの野郎お……」

第二話

道の真ん中で行水したその一時間後、俺はギルドの暖炉の前で暖を取っている。

木造の建物。

長テーブルが六個とカウンター、暖炉と明かり取りの窓、そしてカレンダーが壁に掛かっているだけの殺風景な店。カウンターでは茶色い髭を生やした中肉のマスターが、椅子にどかと腰を降ろして新聞を広げている。一見いわゆる酒場みたいなこの建物は、俺みたいなミドルティーンがくつろぐには少々場違いな雰囲気だ。しかしここは酒場ではないので別に問題は無い。まあ、酒も頼もうと思えば頼めるけど。

この店は、正確に言うと「日当業務斡旋所」、通称は「ギルド」。ここに氏名、年齢、その他を登録すると、日雇いの仕事を斡旋してくれるのである。仕事の内容は迷い猫探しから犯罪者の確保まで様々。このギルドに登録する賞金稼ぎも、子供から戦士、暗殺者まで多種多様だ。俺みたいな子供だって、仕事をちゃんと選べば賞金稼ぎとして生計を立てられる。俺はこのギルドに登録して早二年。できるだけ危険度の低い仕事を選んで、日々の食費を得ている。

「つくしゅー！」

現在俺は、上半身裸で暖炉の火の前で丸まっている。腕には鳥肌がたつて、勝手に体が震えている。俺の服は暖炉の上のハンガーにかかっているが、ぽつぽつと水が滴っている。まだ着るわけにはいかないな。ちなみにさっきこの服の上に羽織ってたジャケットは、背中にきれいな穴が開いたので既に破棄した。それなりに高かったんだぞ？ あれ……。

カランカランッ

ギルドの入口のドアのベルが鳴った。振り向くと、さっきの赤髪野郎と青いセミロングの髪の女の子が談笑しながら入ってきたとこ

るだった。ロットとルーだ。

「あ、ダルク！ いたいた！」

ルーがこっちに駆けてくる。ロットはその後ろをのそのそついて来ながら、

「どうした、ダルク？ 何で上半身裸なんだ？」

「お前のせいだあ！」

カッとなって立ち上がった俺の背中に、直に隙間風が当たる。

「つくしゅ！」

俺は慌ててかがみ、また暖炉に手をかざした。

「お前が俺の背中燃やすからこんなことになってんだよ！」

「そうか。悪い悪い」

「謝罪を四文字で済ますな！ 手えついて謝れ！ 心を込めて！」

と、俺とロットの間にルーが割って入ってきた。

「まあまあ、そんなことよりさ」

「……そ、そんなこと呼びわりですか？」

「仕事が順調にいったんだよ」

ルーがにっこりと微笑む。

「そうそう、私の魅力と巧みな話術でな」

ロットが腰に手を当て、偉そうに胸を反らす。

「ほう……。じゃあ、その首尾を聞こうか」

俺がそう言うと、ロットはあの後どのようにターゲットと親密になったのか、とくとくと俺に語り聞かせた。「宝石のように輝く私の瞳で」とか「シンフォニーを奏でるような滑らかな口調で」とか言ってる時点でだいぶ誇張が入っているのは明らかなので、確認できる事実のみをかいつまんで説明すると、あの後ターゲットを喫茶店に誘い、紅茶のカップを傾けながら、一時間、ナンパにも似た世間話をしていたのだそう。そしてルーは、近くの茂みからその様子を覗き、トランシーバーでその会話を傍聴。内容をメモした、と。

ロットが話し終わると、ルーがぱちぱちと拍手をする。

「どうだ、私の手腕は？ 恐れ入ったか？」

「凄かったよ。レイラさん、最後の方はもう、目がハートになってたもんね。なんかもう、とろけそうな表情でロツトのこと見てたよ」

「ふっふっふ。私にかかればこんなものだよ」

「あ、でもあんまりレイラさんを本気にさせちゃだめだよ？ あくまで世間話ができるくらいに仲良くなるのが狙いなんだからね」

「はは、わかってるよ。ヤキモチを焼かないでくれ」

「そ、そんなんじゃない——」

「あー。ちよつと質問なんだが」

俺は右手を上げて、二人の会話に割って入った。

「どうした？ 女性を確実にお茶に誘うコツを知りたいのか？ それはだな——」

「違う！ そうじゃなくて、今回の仕事についてだ」

「仕事？」

二人はきよんとする。

「そうだ。今回の仕事の目的ってのは覚えてるか？」

「もっちろん！」

ルーが胸をドンと叩いて、勝ち誇ったような表情をする。

「大通り沿いの服屋の店員の青年、カンタさん（28）が、そのターゲット——つまりレイラさん——に一目ぼれしっちゃったんだよね。それでレイラさんの好みの男性のタイプを聞いてくれていう仕事でギルドに来て、私たちがそれを請負った、と」

ルーは俺ににっこりと微笑む。あどけない天使のような微笑に、俺はもう一つ質問する。

「で、そのカンタさんはレイラさんのタイプを知った後、どうするつもりだと思う？」

「どうするって、そりゃあ、レイラさんの好みのタイプ——頼りがいのある人って言ってたけど——になって、彼女を口説きたいんじゃない？」

ルーは何ともなさそうに答える。

「それが、何か問題があるのか？」

ロットが肩をすくめた。俺は息を大きく吸い込み、
「お前が先に口説いてどーするんだっ！」

その後、俺はロットとルーをギルドの床に正座させ、三十分間説教した。

下らない仕事を取ってきたこと。変な台本を書いたこと。火炎斬鉄を使ったこと。俺の服を燃やしたこと。ターゲットを口説いたこと。三十分じゃまだまだ足りなかったが、ルーが正座しながらうつらうつらしてきたので、逆に俺があきれてしまい、もう止めようとした。その時だった。

カランカランッ

ドアのベルが鳴り、

「ほほほほほほほ。相変わらずのようですね、あなたたち」
けたたましい声が聞こえてきて、俺たちは入口の方を振り返った。そこに立っていたのは、クルクルの黄色い巻き毛を揺らし、フリルがあしらわれているロングスカートをたなびかせ、あごを手の甲で押さえながら笑っている、いかにもお嬢様な女の子だった。そしてその後ろからおどした感じの男の子と、だぼだぼのパーカーを着た白髪ショートヘアの女の子が現れる。

俺たちはこの三人のことを良く知っている。何かと俺たちに突っかかってくる三人組。このお嬢様はウエリイ、おどおどした男の子はウエリイの弟のギーン、そして白髪ショートヘアの娘がワイトである。

「まったく、仕事の目的を見失うなんて。思慮が足りないんじゃないんじやなくて？」

ウエリイは勝ち誇ったような顔でルーを見据える。

「う、うるさいな！　べ、別に見失ってなんかないよ！　ロットだって本気で口説こうとしたわけじゃないんだから！　ねえ、ロット

？」

「え？ あ……ああ。も、もちろん！ もちろんだとも！」

ロットは目を泳がせながら答える。………嘘だな。絶対本気だった。

「ふん」

ウエリイは眉毛をぴくぴくさせながら、なおもルーを見据えている。そしてふいにロットの方へと視線をずらし、

「それにしても残念ですわね。この低レベルチームの中でも、あなたのことは買ってますのに」

急にウエリイに視線を合わせられ、ロットはのけぞった。ウエリイはつかつかとロットの目の前に近づいていく。

「ねえ、私たちのチームにお入りにならない？ 今からでも遅くなくつてよ？」

「へ？ いやあ……」

ウエリイに見据えられ、ロットは困惑の表情。

………「まったく、俺なんかにはいつも偉そうにするくせに、女の子には総じて弱いんだよな、こいつ。いっぺん女装して、ボロ雑巾になるまでこき使ってやろうか！ ……いや、冗談ですよ？」

「こらー！ あたしの目の前でロットを勧誘するな！ そんなの許すわけないでしょ！ それにロットもちゃんと言い返しなさいよ！」
ルーがいきり立って、床をドンドン踏みつけている。

「いや、しかし、女性の好意を無下に——」

「好意じゃない！ どうせこいつ、ロットを使えるだけ使って、最後には紙くずみたく丸めてはいするつもりなんだから！」

「まあ、何て人聞きの悪い！ 私はそんなこといたしません！ ロットさんの持っている大剣、そしてロットさんが繰り出す剣撃は一級品ですわ。こんな弱小チームの中で埋もれさせるにはもったいなさ過ぎるものです。私ならその能力を限界まで引き出し、そして仕事の中で最大限活かして差し上げることができます。だからロットさん。私たちと一緒に——」

「だからやめろー！ このスパゲッティ頭！」

「す……スパゲッティ？ な、なんて事を！ このセットには一時間もかかってるんですよ！ 言葉に注意しなさい！ この青ガツパ！」

「あ、あああ、青ガツパ？ この——」

ふいにウエリイの後ろで小さくなっていたウエリイの弟ギーンが、ウエリイの背中をくいくい引つ張った。

「ちよつと姉ちゃん。こんな所でやめなよ。ほら、マスターもこつち見てる。恥ずかし——」

「ギーンは黙ってなさい！」

ウエリイは一喝する。その覇気でギーンは後ろにポテンと倒れた。「あうっ」と背中をさすっている。

……相変わらず損な役回りだなあ、弟君。いつでもどこでも常識人は苦勞するもんなんだ。少々同情してしまう。

俺とギーンとワイト、そしてロットまで置いてけぼりにして、ルーとウエリイの言い争いは益々白熱していく。そして終いには、

「なによ！ やろうつていうの！」

「そちらがその気なら、別に構わなくてよ？ 私に挑む度胸があるにあればの話ですが」

「なにを偉そうに！ 決着つけてやる！」

ついにルーは、腰のベルトから青く輝く銃を取り出した。それと同時に、ウエリイも黄色い石が頭頂に取り付いたロットを振りかざした。慌てて俺は

「おい！ お前ら何する気だ！ こんな所で！」

「ダルクは黙ってて！」

「あなたは黙ってなさい！」

二人に凄まれた。

……ってか、こんな屋内で洒落にならないぞ？ 早くこいつら止めないと！

と、

「……………」

突然、白いショートヘアを少し揺らしながら、ワイトがウエリイの前にすつと出てきた。無表情のまま無言で、ウエリイを庇うように立っている。

「な、何よ、ワイト！ 邪魔する気？」

ルーが叫んだ。しかしワイトは白い前髪を少し揺らし、静かにルーを見据える。そして聞き取れるか聞き取れないかの声で、

「ウエリイのことは……撃たせない」

その行動と発言に、一同は少しの間あっけにとられた。しかしルーはなおも銃を構えたまま、

「あんたが盾になろうっていつの？ 言っとくけどあたしの銃は――」

「それでも……撃たせない」

ルーの言葉を遮り、ワイトは強い目線でルーを見据える。そしてダバダボのパーカーの袖口から、彼女の武器であるアイアンクロウをちらつかせた。その爪の先端がキラリと鈍く輝く。

またもしばしの沈黙……。

ルーも、この成り行きにどうしたらいいのかわからなくなっていくようだ。

そして数秒の後、

「まあ、室内で暴れるわけにもいきませんし、とりあえず今日の所は帰りましょう」

何とも言えない空気のせいでさっきの覇気は落ち着いたらしく、ウエリイが嘆息して言う。

「ふん。さっさと帰れ帰れー」

野次をとばすルー。

「そろそろ夕飯の時間ですしね。カップの相手をして疲れました」

「な……ま、またカップって言ったー！」

しかしウエリイは構うことなくスカートを翻し、ドアの方へ歩き出す。

「それでは、またそのうち」

捨て台詞のようにそう言って、彼女はギルドを出て行った。その後ろをギーンが

「姉ちゃん待ってよー」

と追いかけていき、ワイトも無言でそれに続く。カランカランツとドアが閉まるのを見計らい、

「はあ……」

俺とロットは同時に肩を落とし、ため息をこぼす。

「なんなのよあいつ！　いつつもいつつも、むかつくことばっか言つて！」

ルーはまだいきり立っている。

「誰がカツパよ！　あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ、あのスパゲッティめ……」

謎の呪文を繰り返すルー。………一ヶ所、口が回ってなかったぞ？

「しかもワイトまで邪魔するし！　なんなのよ！　もー」

「ぷりぷり」という擬音がちょうど当てはまるように、ルーはほつぺたを赤く膨らまして怒っている。

「まあ、ワイトのウエリイに対する忠誠心は今に始まったことじゃないだろ？」

ロットがなだめるように言った。

「そりゃそうだけどさー」

言いながら、ルーはどかっと椅子によりかかった。まだふくれっ面だ。俺はその顔を横目で見つつ、「ふう」と息を吐きながら、

「それにしても、何でワイトはあんなにウエリイを慕ってるんだ？」話題を少しばかり逸らそうと、そんな質問を投げかけてみる。

「何だ、ダルク。お前知らないのか？」

肩をすくめ、驚いたように言うロット。

「え？ 何か理由があるのか？」

「ワイトのあの左手は知ってるだろう？」

ロットも椅子に腰掛けながら言う。

「ああ、そりゃ知ってるけど」

俺はロットの向側に腰掛けた。

さつきはだばの服を着てたからよく見えなかったが、その袖の中に隠れてたワイトの左手。実は、そこに手は無いのだ。手首から下が存在していない。何故か代わりに白いアイアンクローが仕込まれている。さつき袖口から先端だけがのぞいていた、白く輝く三本の鋭い爪が生えているクローだ。

ワイトは戦闘の際、そのクローを使う。何度か彼女の戦闘を見たことがあるが、彼女はそのクローがさも彼女本来の手であるかのように扱っていた。息を呑むほど卓越した技術だったのを覚えているが、しかし、

「それとウエリイと、何か関係があるのか？」

「ああ、あるある。おおありだ」

ロットはまたも肩をすくめる。

「ワイトの左手はずっと前からああだった。いつからなのかは知らないが。おかげで彼女の周りには大人も子供も、誰一人として寄りつかなかったって話だ。実際私が初めて彼女の左手を見たときも、一瞬凍りついてしまったしな。人体の一部が武器というのは、太平の世の中では畏怖するものだ」

「そうだねー。あたしも初めて見たときは、やっぱり固まっちゃったな」

テーブルに頬杖をつきながら、ルーは思い出すように相槌を打つ。「おかげで彼女は、幼少の頃から一人で生きること余儀なくされたそうさ。彼女がギルドで生計を立ててるのも、一般の職種が彼女を受け入れなかったからだろう」

「そうだよな。あの左手じゃ、普通のお仕事なんてできないだろうし」

「で、そんな彼女に初めて救いの手を差し伸べた存在が、実はウエリイなのだ。ウエリイは、一人で賞金稼ぎをしていたワイトを自分のチームに誘った。客観的に見れば、ただワイトの戦闘能力に目をつけてスカウトしたって所だろうが、それでもワイトにとってウエリイは、孤独から救い出してくれた救世主になるわけだ」

「へえ。あのウエリイがねえ」

あの高飛車女がそんな優しい一面を持っていたとは。人は見かけによらんもんだな。

「それでワイトは、命を賭してその救世主を守ってるってわけか」
「そういうことだ」

ロットは神妙に頷く。

命を懸けるほどの恩……ねえ。いつも無表情を決め込んでるワイトからは、そんな心理変化なんてとてもじゃないが見えない。頑ななまでのポーカーフェイス。しかしそれはそう見えないってだけで、その奥では案外デリケートな葛藤があったりもするってことか。幼少から一人ぼっち……。俺はワイトじゃないからの確にその心情を想像することなんてできないが、それでも寂しくて切ないことだけは、何となくわかる。あの無表情も、その幼少体験に起因するんだろう。そしてだからこそ余計に、ワイトの心の中でウエリイが輝く。救いなのは、ウエリイがその忠誠心を悪用するような劣悪な人種ではなかったこと。何となくだが、ウエリイがワイトに手を差し伸べたのも、ただ戦闘能力を当てにただけではないんだと思う。あいつは何だかんだ言ってちゃんと弟の面倒も見てるしな。ルーと顔を合わせるとあなのは、ただ単にロットがからんでるからだけで、普段は分別をわきまえている。ルーや、もしかしたらロットなんかよりも人格はできているのかもしれない。

「ま、気を取り直して新しいお仕事探そっか」

ルーが立ち上がった。ようやく気持ちを切り替えたらしく、表情はいつものあどけないものに戻っている。

「ちよっと待ってて。仕事表もらってくる」

そう言ってカウンターのほうに駆けていく。

ルーはしばらくカウンターによりかかってうんうんうなっていたが、何かを見つけたようにぱっと笑顔になって、またこっちに駆けてきた。

「ねえ、これなんかどう？」

ルーが差し出してきた仕事表。ルーが指し示す先には、
『遺跡調査』

……どうしてこいつはいつも、こうキワモノな仕事にばかり目をつけるんだ？

百パーセント気乗りしないが、こいつらが頭ごなしに却下しても聞きやしない性格なのは十分すぎるほどわかっている。前例も腐るほどある。しょうがない、諭す感じでいこう。

テーブルの向こうで

「いつもながら目の付け所がいいな、ルーは。さすが私が見込んだだけのことはある」

とか

「えへへ。ありがと。やっぱこういうお仕事の方が楽しいもんねっ」とか盛り上がっている二人に対して

「なあ、ロット、ルー。お前らに聞きたいことがある」
神妙な顔を作りつつ、俺は切り出した。

「ん？ なに、ダルク？」

きょとんとするルー。俺はなおも静かな口調で
「お前らにとつて、『仕事』っていうのは何だ？」

テーブルに両腕を置きながら、俺はそう続けた。

「え？ 仕事？ なーに？ 急に変な顔して？」

へ、変な顔？ …………… いや、落ち着け、落ち着け。

俺は「コホン」と咳払いをしつつ、

「義務でやってるやつもいるだろうし、仕事は生き甲斐だと答えるやつもいるだろう。暇つぶしだと答えるやつもいるかもしれない。人それぞれの考え方、価値観があるものだ。じゃあ、お前らにとつ

てはどうだ？ お前らにとって、このギルドでの仕事っていいのは、人生における何なんだ？」

俺の問いかけに、ルーは口元に人差し指を当てて「うん」としばらく考えてから、

「楽しむもの！」

誕生パーティーでケーキのろうそくを吹き消した直後のような満面の笑みを浮かべながら、そう言った。次にロットの方を見ると、

「『仕事』……か。一般的な定義からすれば生計を立てるためのもの。世俗的な表現を借りれば金稼ぎに他ならないが……。しかし私の場合、そんなつまらない理由で日々を生きたりはしないのだ。『仕事』……。それは私にとって、いわば自分の真価を見極めるためのものだ。果たして自分の器はいかほどのものなのか？ 自分はどこまで成長できるのか？ 自分が本当に望むものは何なのか？ それらの答えを探し求める道。決して終わりなどない道。それが、それこそが——」

「もういい、わかった」

いい加減、俺はロットの言葉を切った。元々こいつらの返答に期待などしていなかったが、それでも期待外れと感じるほどの外れっぷりだ。

「つまりルーにとって、『仕事』ってのは楽しむこと。ロットにとっては……その……自分探し？……だと。じゃあ、もう一つ聞く。

もしその、ものすごく楽しくて、自分のことも百人分くらい探せそうな依頼が報酬なしで来た場合、それは仕事と呼べるか？」

「えー？ お金もらえないの？ それじゃあ仕事にならないよ」

「うむ。必要経費というのものもあるし、報酬なしでは受けられんな」

口をへの字にする二人。俺は自分の思惑通りの返答にようやく安心しながら、

「だろ？ やっぱり仕事には報酬が必要だ。欠かせない。じゃあ、今ルーがとってきた仕事を見てくれ。その『遺跡調査』だ。報酬の欄。書いてあるだろ？ 何かしらの発見があった場合にのみ報酬

が発生します』って。つまり、何かが見つからなきゃ報酬はないんだ。仕事にならない。遺跡の探索はしんどいし発見なんかそうそうないって、この間ギーンがグチってたろ？　つまり、この仕事を請負っても報酬をもらえる可能性なんてほとんどないんだ。仕事にならないんだよ」

俺がここまで説明すると、

「うん……わかった」

グランドクロス並みに珍しく、ルーが沈痛な顔をして頷く。

「ああ、お前の言わんとしていることはよくわかる」

ロツトも瞳を閉じ、静かに頷いた。

「そうか、ようやくわかってくれたか」

言いながら俺が安堵のため息をつくとき、

「つまり、この仕事を『仕事』と成り立たせるためにはそれなりの覚悟が必要。だから気を引き締めていこうと、そういうわけだな」

へ？

「ふっ。普段は淡白なお前がそこまで力説するとは。久々に私の胸にも熱いものがこみあげてくる。まさに自分の真価を見極めるに適した仕事だな」

いや、ちが……。

「うふふ。あたしもなんだかドキドキワクワクしてきちゃった。じ

ゃあ、この仕事を請負うってことで決まりね。楽しみ」

ちがーっ！

第三話

結局、一時間にわたる反論も虚しく次の仕事が『遺跡調査』に決定してしまい、「明日は午前九時にギルドに集合ね!」という將軍補佐官殿(いつの間にか昇級していたらしい)からのお達しを受けて、予定以上に疲労困憊した体を引きずりつつ、ようやく俺が我が家の玄関のドアノブに手をかけたのは、夕日もすっかり沈んだ夜。辺りは完全に真っ暗だ。

「そもそも何で俺はあいつらとチームを組んだんだ?」と自問し、ルーに「ねえねえ、あたしたちのチームに入らない?」と誘われた時まで記憶を遡り、そう言えばあの頃はルーのあどけない笑顔に人知れず心惹かれてたんだっけなあと思いつき出し、そのときに「ぜひ!」と即答してしまったことへの後悔の念が、ため息となって俺の口から出て行く。俺は一体、物語の冒頭から何回ため息をつけばいいんだ?

自然と垂れていく頭を何とかもたげながら、

「ただいまあ」

と言つて俺は我が家の玄関のドアを開けた。
すると廊下には

「あ、ダルク。お帰りなさい」

と、ジーンズにエプロンといういでたちで、黒い長髪を揺らしながら柔らかに微笑む、なかなか長身の青年が立っていた。俺の従兄弟にして、現在唯一の同居人であるラキだ。

ラキは、玄関に飾つてある観賞用のサボテンに水を遣りながら、
「ふふ。お疲れ様です。こんな遅くま——あれ? ジャケットはどうしたんですか?」

「……………燃やされた」

「おやまあ……。壮絶な戦闘があつたみたいですね。ふふ。疲れた顔をしてますねえ。今日のお仕事はハードだったんですか?」

「……仕事で疲れるんならどんなに良かったか」

俺はがつくりと肩を落とし、靴を脱いでスリッパに履き替える。

「ふふ。またチームのメンバーと何かあったんですか？ ロット君と？ それともルーさんと？」

「……両方だよ。さらに言えば、それ以外のやつとも……」

「それはそれは。ふふ。まあ、それもいつものことじゃないですか」
……慰めになってないって。

「ふふ。さ、もう夕飯も出来てますよ。リビングへ行きましょう」

そう言いながら、廊下をばたばた歩いていくラキ。

俺もその後に続いて、リビングへと歩を進める。

……しかし、年上だったのにやたらかしこまったラキの口調や、二十三歳とは思えないような落ち着いた物腰を見ると、とても四分の一ほど同じ血が通ってるとは思えない。人となりってのは、環境によって形成されるものなんだろうか？

確かに、ラキの境遇が奇異であることは、彼の両親が十年前にすでに他界していることから異論はないだろう。ここ数年、仕事の都合で親にほったらかしにされてる俺も似たような境遇ではあるが、しかしその深刻さが違う。まあだからって、今さらわざわざ同情しようなんて思わないけどね。一緒に暮らし始めて、もう五年も経ってるんだ。もはやそこまで他人行儀な関係でもない。

リビングにたどり着くと、テーブルに置かれた鍋の中では、シチューが湯気を吐いていた。

「さ、冷めないうちに早く食べましょう」

そう言って、ラキはシチューを浅皿によそり始める。

俺は自分の席にどかりと腰を降ろした。そして「いただきます」というお決まりの挨拶をしつつ、眼前に用意されてたフォークを手取る。

味を楽しむよりも空腹を満たすことを主たる目的としながら、手近の皿に盛られていたパスタを口に運んでると、

「しかし、ダルク。あまり無理はしないでくださいよ？ いつ危険

なことに巻き込まれるかわかりませんからね」

自分の皿にシチューをよそりながら、ラキがそんなことを言うてきた。

あんたは俺の母親か、と思いつつ、

「大丈夫だよ。俺だってその辺はちゃんとわきまえてる」

「ならいいんですけどね……」

そう言つて、ラキも自分の席に着いた。

「だけど、心配なのはそこだけじゃありませんよ」

「へ？」

「たとえば体が無事だったとしても、頑張り過ぎることで、逆に自分の首を絞めてしまうこともあるんです」

俺はパスタをぐくんと飲み込みながら、

「何の話？」

「そうですね、例えば肉屋さんを考えてみてください。普通の町にある、普通の肉屋さんです。市場とあまり変わらない値段で商売をしている分には、『敵』は同業者——つまり同じ町にある他の肉屋さんだけです。同業者とだけ客の取り合いををしていればいい。この場合、注意すべきなのは同業者だけです。競う相手は、同じ肉屋のみ。しかし、もしお肉を市場よりもだいたい低い値段で売り出した場合はどうでしょう？　そこまで低い値段で売り出したら、魚屋や、もしかしたら八百屋やパン屋にまで影響が出てしまうかもしれません。同業者以外の店にも敵愾心を持たれてしまう。つまり、『敵』がいたるところに出来てしまうのです」

「……ギルドの仕事もそうだと？」

「そうです。『賞金稼ぎ』という枠の中で働いている分には、『敵』は同業者——つまり、他の賞金稼ぎだけです。ギルドの仲間内で競つていればいい。しかし仕事を頑張りすぎて、例えば犯罪組織や殺し屋なんか目につけられてしまったら、一体どうなります？　仕事と関係のないところでも、命を狙われることになってしまいますよ。それでもなお、諦めずに頑張ってしまったら？　最終的には、

全てを『敵』に回すことになってしまえますよ。ね？　いつも言っているでしょう？

『能力は商品』なんです。

無闇に安売りするものではないんですよ。商売以外に使うなんてもつての外。その辺をもっと理解してください」

そこまで言つて、シチューをすするラキ。

……なるほど、結局そこに行き着くわけか。

『能力は商品』

ラキが、年長者として唯一俺に言い聞かせている言葉だ。何度言われたかなんて覚えてない。五年前から何度も、鬱陶しいくらい繰り返された言葉だ。

まあ、ラキも数少ない親族の一人である俺を心配して言ってるんだろう、と俺は思い直し、

「……わかったよ」

と答えた——　答えておいた。

第三話（後書き）

すいません、タイトル少し変えました。

ずらつと並んだ皆さんのタイトルを見てると、
考えなしにつけたことがバレバレだったので……
（汗

第四話

これは、図書館に置いてあった歴史書に書いてあったことだ。

今から何千年も前、この世界には《てくのろじー》やら《こんぴゅーたー》なるものがはびこっていたそうだ。そして、その《てくのろじー》だかのおかげで、人間は労もなく何百キロも移動したり、階段なしに高いところに登ったり、さらには空をも飛んだらしい。しかも、人間をそっくりそのまま何もないところから作り出す一手前までいつていたそうだ。

現代では、とても考えられない。

そんな便利なもんが世界中にあったっていうなら、羨ましい気もする。しかしそれは写真も残っていないような昔のことで、その世界がどんな風だったのか知るすべもなく、俺には想像すら出来ないなもんで、どこをどう羨ましがればいいのか、正直よく分からない。いずれにせよ、そんな《てくのろじー》も《こんぴゅーたー》も、すでに滅んでしまったわけだ。

《えねるぎーこかつ》というのが問題だったらしい。《かせきねんりょう》がなくなったせいで、その《てくのろじー》を維持できなくなった——と、本に書いてあった。

結局、時代は後退した。

しかしだからって、原始時代にまで逆戻りするわけではない。この数千年の間に、新たな発見もあった。

その一つが『石』というもの。

別にこれは、普通の石ころのことではない。特異な性質を持った『石』だ。

約五百年前、どこだかの山奥で、旅人が変わった色をした『石』を発見した。

赤みがかった石。旅人がその石を地面に打ちつけてみたところ、火花——ではなく、炎が発現した。石全体が赤々と燃え上がり、そ

の旅人は慌ててその石を投げ捨てた。地面に転がってもなお、その石は燃え続けた。

周囲には他にも黄色や緑や紫の石が転がっていた。試しに他の石も打ちつけてみたところ、電気が走ったり、霧を吐いたり、色によって様々な性質を現した。

これが、『石』を人間が使うようになった始まり——なんだとか。

今では、この『石』は大々的に発掘され、人はみんな当然のようにこれを使っている。火を起こしたり、電気で明かりをつけたり冷気で物を冷やしたり。《てくのろじー》には及ばないだろうが、それでもなかなか便利な思いをさせてもらっている。

何でまた『石』がこんな性質を示すのかは、現在でもほとんどわかっていない。「現代に《てくのろじー》があれば、その謎も解き明かされただろうに」と、国の研究所の学者なんかは言っているそうだ。

この『石』は、生活の中でも頻繁に使われているが、当然のように武器にも応用されている。

いい例が、ロットの大剣『グレン』だ。刀身に『赤石』が埋め込まれていて、剣を勢い良く振ったり、何かに打ち付けたりすると、刀身が炎を纏うようになっていく。それにより剣の攻撃範囲が広くなり、こと生物に対してはダメージも大きくなる。大した性能ではあるが、しかし俺にはその大剣に関して、ほとんど嫌な思い出しかないのが残念極まりない……。

ウェリイのロッド『ムマ』や、ワイトのクロー『ツバメ』なんかもそうだ。それぞれ『黄石』と『白石』が使われている。ルーの銃は少しばかり事情が違うが。

そして、今俺が右手に握っている紫色のナイフ『ムゲン』も、『紫石』が埋め込まれた特殊な短剣である。……………特殊とは言っても、ロットの大剣やルーの銃と違って、市販品だけだね。

ようは、このナイフで生物を切りつけると傷口から毒が回るのだ。

大して深刻な毒ではないが、襲ってきた獣を足止めするくらいには十分役目を果たす。危険な状況に巻き込まれないよう注意していれば、ギルドの仕事くらい、この程度の装備で十分なのである。

俺は自分のベッドに座り、『ムゲン』を掌の上でクルクル回し始めた。

別にこれは意味のある行動でもないが、しいて言うなら訓練みたいなものだ。ナイフを手になじませ、神経を研いでおく。これをしなかったからと言って技術がフリーフォールのように落ちるわけでもないが、まあ、やっておいて損はないだろうという感じ。それだけだ。

ナイフを回転させたまま左手に持ち替え、今度は人差し指と中指で回す。そして宙に放り投げ、右手で柄を掴んだ。そのままするりと腰のホルダーにしまい、俺は立ち上がる。

俺は部屋を出て、リビングに向かった。

現在時刻は朝の八時。

ラキが朝飯を作ってる頃合だろうと思いつながら行くと、そこには誰もいなかった。代わりに、リビングのテーブルの上にはサンドイッチが乗った皿と書置き。

それをくしゃりと持ち上げ、その字面を読むと、

『すいません。仕事で早く出なければならぬので、先に出ます。』

朝ごはんは作っておきましたが、昼食は自分で用意してください』

俺は「ふん」と言いながら椅子に座り、サンドイッチの咀嚼を始めた。

九時ジャストにギルドに行くと、赤はおらずに青だけがあった。：

……って、こんな省略のしかたをすると怒られるか？ ようは、ルーだけがギルドの椅子に座って待っていた。ぼーっと窓の外を眺め、子供のように足をぶらぶらさせている。

今までどんなに集合時刻が朝早い場合でも、ルーは一度も遅刻を

したことがない。まあ、その理由も明白で、つまりルーが「おじいちゃん子」だからである。老人の朝は総じて早いもので、それに合わせて生活しているルーの朝も必然的に早くなるのである。

「あ、ダルク！ おはようー！」

俺に気付きてルーは満面の笑み。頭の上で手をブンブン振っている。……朝一でこの甲高い声を聞くのは、少々辛い。

俺はルーの方に近寄りながら、

「ああ、おはよう。……………ロットはまだか？」

「うん。全然まだー」

「…………ま、そりゃそうか」

ロットの遅刻も予想の範囲内。あいつが時間通りに集合場所に来た日は、決まって雨や雪が降る。今日は晴天だ。

俺は嘆息して、ルーの向かい側に座った。

「あはは。ロットが時間通りに来るなんて滅多にないよ。ダルクが朝一で一発ギャグをかますくらいあり得ないっ」

「…………そうだな。ルーがカッパの何たるかを知らないで、『青ガッパ』って呼ばれて怒るくらいあり得ないな」

俺が言つと、ルーは口を尖らせ、眉を逆八の字にして、

「もー。人のことバカにして。あたしだってカッパくらい知ってるよ」

「そうかい」

そう答えつつ、そりゃそうだでなけりやお前が実は学者の娘だって事が信じられなくなるよと思いながら、俺は道すがらに買ってきた新聞を広げた。

俺はこの一言で話題が終わった気になっていたが、ルーの方はそうは思っていないかったらしく、俺の方に身を乗り出すように、両手で頬づえを突きながら、

「カッパって、キュウリのことでしょ？」

俺は驚いて新聞から顔を上げた。

「……………は？」

「あたしだってお寿司くらい食べたことあるんだからねっ！　　かっぱ巻きも食べましたっ！」

ふふん、と鼻を高くするルー。「冗談を言っているようには――

――残念ながら見えない。俺をたばかつてる様子もない。

俺は本格的にこいつが実は学者の娘であることが信じられなくなりながら、

「……………カッパが……………キュウリ？　……………そうになると、『青カッパ』ってのは、青いキュウリのことなのか……………？」

「そうでしょ？」

ルーは平然と答える。

俺は啞然、もしくは呆然としながら、

「……………真っ青なキュウリなんて、食べたくないな」

「だよね」

首を傾けて笑うルー。

……………はてさて。ルーにカッパが人外の生き物であることをちゃんと教えようか迷っていると、

「お。みんなお揃いだな」

後ろから十台半ばの男子の声がしたので振り返ると、十台半ばの男子たるロットが「グッモーニン」と手を上げていた。

ルーは俺からロットの方へと笑顔を移し、

「あ、ロット。おはよー」

「うむ。さあ、今日も気を引き締めて仕事に精を出そうではないか」
清々しい声で言うロット。まるで早起きを生業としているかのよう
うな、澄み渡った声の通りである。

しかし、壁に掛かっている時計を見ると、時刻は九時十分。

俺はロットにジト目を返しながら、

「……………期待はしていないが、それでも一応言わせてもらおう。九時集合のところを九時十分になってから現れたロットには、九時にこ

ここに来ていた俺とルーに対して、何か言うべきことがあるんじゃないか？」

「私が君らに言うべきこと？ ……はて？ ……『本日はお日柄も良く』？」

「違う」

「『絶好の仕事日和だな』？」

「違う」

「『この一瞬一瞬を大切に生きてい——』」

「それも違う」

段々かけ離れていきやがる……。

終いには、ロットは腕を組んで本格的に悩み出した。……本当に心当たりがないらしい。

「……もういい。さっさと行こう」

俺は嘆息しながら言いつつ、立ち上がった。

俺たちがこれから調査する『グランデル遺跡』というのは、つい数週間前に山中で発見された古代遺跡である。

何でも、国の地質学者が山を調査している際に、地面を掘り返していたら偶然見つけたらしい。発見された直後から世界各国の研究機関が調査員を派遣してきているそうだ。今回の俺たちの雇い主も、隣国の研究機関である。

この遺跡はグランデル山の中腹にあり（だからこそ『グランデル遺跡』と名付けられたわけだが）、とてもこの町から徒歩で行ける距離ではない。休みなく歩いて二十四時間でたどり着けばいい方というような場所にあるのである。

なので、ギルドを出た俺たちは当然のごとく馬車の停留所に向かった。

そこで俺たちを出迎えてくれたのは、

「お。来たか、お前ら」

茶髪をバンダナで縛り、Ｔシャツにハーフパンツ、サンダルという随分とラフな格好をしたお兄さん——というより、あんちゃんと呼んだ方がしっくりくるだろう——アンディさん。ギルドに登録している賞金稼ぎであり、ランキングで二十位内に入る猛者だ。

——このランキングと言うのは、もちろん賞金稼ぎのランキングであり、ギルド本部が獲得賞金によって、全世界の賞金稼ぎに序列をつけているものである。世界には何万人という賞金稼ぎがいることを考えても、その中で上位二十人に入ることがどれだけすごいか想像に難くないだろう。………もっとも、この威厳が微塵もない服装をしているせいで、正直なところ俺は、この人が本当に凄いのかどうか半信半疑だったりもするんだが……。

ともかく、年齢も実力も一応目上の人なので、俺は少々かしこま
って

「お待たせしました。今日はよろしくお願いします」

と頭を下げた。
すると、

「おう。こっちこそよろしく頼むぜ。何か見つけてくれよー？ く
はは」

そう言って高笑いしながら、俺の背中をバンバン叩くアンディさ
ん。……背中がめっちゃ痛い。

——ちなみに、何でまた俺たちが、今日、この人と待ち合わせし
ていたかと言うと、

「今日は俺、現場監督つーことで、ずっと見張りだ。遺跡内部の
調査はお前らに任せるぜ」

「はい。わかりましたー」

元気に右手を上げるルーと、

「任せておいてください！ 宝船に乗ったつもりで待っているがよ
ろしいでしょう」

胸を張るロット。

「お、頼もしいじゃねえか。くははは」

そして破顔するアンディさん。

「さ、この馬車に乗ってくれ。遺跡に向かうぜー」
俺たち四人は馬車に乗り込んだ。

第五話

町を出た三時間後。

俺たちはようやく『グランデル遺跡』の入口にたどり着いた。この遺跡は山の洞窟の中に作られたもので、その入口が俺達にぽかり口を開いている。

これからいよいよ仕事が始まるってのに、俺はどうにもこうにもなんかこう、緊迫感みたいなものが持てずにいた。

それと言つのも――

「なあ、お前ら、これ知ってるか？ ギルドのあの店の中でも、一応軽いメシは食えるじゃん」

「ええ。我々も時々、あそこで昼食なんかをとったりしますよ」

「あそこのメニューは、トーストやら、パスタやら、普通のメニューが並んでるが、実はあそこで頼めるメニューは、あれだけじゃないんだと」

「ほう。他にも料理があるんですか？」

「へー。知らなかった」

「ああ。あくまで噂でしかないんだが、何でもランキングでトップテンに入ると、すげえ豪華な裏メニューを頼めるらしいんだ」

「ほう。裏メニュー……ですか」

「トップテンに入ってるやつに聞いても知らん振りされるんで、それがどんな料理なのか知るすべがないんだがな。……だが俺は、ここで一つ気がついたんだ」

「何です？」

「トップテンにポーラってやつがいるんだが、そいつは自称美食家でな、賞金で儲けた金であっちこちの高くてうまいもんを食い歩いてるんだ。そいつ舌が肥えちまってさ、普通のレストランじゃ絶対食事しないし、高級料理店でもウマくないのが出たら、クレームつけまくって悪い噂をガンガン流しやがる」

「ええ、彼女のことは知ってますよ。うちの町のギルドに登録してるんですよ」

「うん、あたしも一回見たことあるよ。すごい美人さんだった」
「で、だ。考えてみる、お前ら。美食家ってんなら、そのギルドの裏メニューなんて食べないわけにはいかないよな。ポーラは食ったことがあるはずだ。しかし、あいつが裏メニューにクリームをつけたなんて話は聞いたことがない」

「……ということは、つまり？」

「その裏メニューは、ポーラをも納得させる料理だってことだ」
「……なるほど」

「さらに、だ。問題はその裏メニューの食材だ。ポーラがあの町のギルドに登録してるなら、あの店で裏メニューを食べたはずだ。あの町で用意出来る、ポーラを納得させることができる食材なんて、あれしかないだろ」

「あれ？」

「そう。『アクアマグロ』だ！」

「『アクアマグロ』！『アクアマグロ』って、あの『アクアマグロ』ですか！あの、一切れだけで何百ドルもするという、あの『アクアマグロ』ですか！」

「ああ。なんせ、ランキングトップテンの人間が食べる料理だからな。それほどの高級食材でもおかしくない」

「た、大変だよ！ ロット！早くあたしたちもトップテンに入らなきゃ！」

——食い意地だけで頂点に立てるほど、賞金稼ぎ業界も甘くはないだろう。

馬車に揺られている間、麓の村で昼食の弁当を買っている間、宿屋の手配をしている間、そしてグランデル山を登ってる最中も、三人はずっとこんな話をしていた。遺跡に相對している現在も頭の中はマグロでいっぱいらしく、俺の横で、焼き魚と刺身とどっちがおいしいか意見を戦わせている。

「え〜？ だって、焼いちやうと食感が無くなっちゃうじゃない」

「食べ物というのは、すべからく焼くべきなのだ。魚も例外ではない。生臭い匂いも消えるし。中^{あた}る、という危険も無くなるしな」

「だがよ、お前ら、少なくとも白身魚は——」

「……あの、遺跡に着きましたし、そろそろ中に入りませんか？」

俺はこの遺跡にシーラカンスの化石でも探しに来たような心境になりつつ、一分の義務感を奮い立たせて議論を遮るように言った。

「うむ、そうだな。まずは眼前の目的を達成しなければ。『アクアマグロ』への道も一歩からだ」

「そうだね！ 目指せトップテン！」

「くははは。じゃあ俺はここで見張つとくからよ、早速行つて来い」

そう言つて、アンディさんは荷物を地面に下ろした。調査隊である俺とロットとルーも、大きい荷物をアンディさんに預け、できるだけ身軽な格好になる。

「では、行つてきます」

「いこーっ！ 目指せお宝！」

これでもかつてほど生き生きした顔をするロットとルー。颯爽と遺跡の入口に足を踏み入れていく。

「くはは。まあ『銀石』でも見つけりゃ、ランキングも結構上がるんじゃないか？ ま、気をつけてな」

手をひらひら振るアンディさん。

「はい」

そう答えて、俺たちは遺跡に入つていった。

——『銀石』と聞いた瞬間、ルーの瞳が鈍く光つたのを、俺は見逃さなかった。

第六話

コケに覆われた石畳。

遺跡に入っただけで三十分くらい経っているが、さすがにもう外からの光は入ってこない。周囲は完全に暗闇である。

村で買っておいた『赤石』の明かりだけを頼りに、俺たちは真っ暗な回廊を進んでいく。湿気をやたら含んだコケのせいで時折滑るので、足元に気をつけながら、そして分岐を（主に俺が）慎重に選びながら、立ち止まることなく歩いていく。

この遺跡の内部は、壁も床も天井も石と粘土が積み重なっているだけの造りで、所々にひび割れができていく。いかにもそろそろでそのうち崩れるんじゃないかと俺は少々冷や冷やしているのだが、逆に言えば壁がひび割れるくらいの期間無事を保ったんだから、むしろ安定してるんじゃないかとも考えられなくもない。

「ふむ、しかし――」

足音だけがコツコツ響いている中、ロットが独り言のように話し始めた。

「――これほどの遺跡とはな。このコケがびっしり生えた壁を見てみる。何百年と言っ年季を感じさせる。ふふふ。もしかしたら本当に、ここに『銀石』があるかもしれないな」

「……そうだな」

とりあえずの生返事。我ながら話に対する興味のなさが如実に現れている返答だったが、問題ない。ロットはそんな細かいところにこだわらない人間なのである。逆にこだわってほしいと思っているくらいだ。

俺はロットから視線を外し、ちらつと横を見た。

ロットの逆隣。ルーは黙りこくったまま歩を進めている。

いつもならば頼みもしないのにしゃべりまくり、無駄にチームのテンションを上げるルー。そのルーがここまで静かなのは、珍しい

と言えば珍しいことだが、しかしたまにはあることで、つまりさっきの『銀石』というキーワードが原因だ。

恐らくルーは今、彼女の父親について考えているんだろう。

ルーの父親。『銀石』の発見者である研究者。ルーに銃『サイキ』を渡した人物。

その人となりは、ルーから、あるいは噂話などでいくらか聞いているが、しかし俺は一度も彼に会ったことはない。それというのも彼が、俺とルーが出会う以前——今から五年前——に失踪しているからだ。

そう——失踪である。

行き先は不明。生死も不明。この五年間、連絡が何一つない。噂では、彼が『銀石』に関わる研究をしていたため犯罪組織に連れ去られたと言われている。確証はないが、しかし彼の経歴からして十中八九そうだろうと俺も思っている。

ルーが十一歳の時にいなくなってしまった父親。

ルーが賞金稼ぎをしている理由も——半分くらいは——そこにある。父親を探すことは、ルーにとって当面の生きる目的。念願、悲願。

だからこそ、彼の鍵である『銀石』という言葉に過剰に反応してしまう。……確かに、無理のないことではある。

しかしここまでルーに無言を貫かれてしまうと、チームとしてのリズムが狂ってしまう。何と言っても、この場合、必然的に俺が口ツトの話し相手になってしまふのだ。仕事以外のことでこれ以上疲れたくないかない。

「……ま、ここに『銀石』があるかどうかはともかくとしてさ」

俺は心底で嘆息しつつ、ルーの隣に並びながら、

「ここで何か見つけないと金にはならないんだ。今日は気合い入れてかなきゃな」

そう言つと、ルーは少しの間俺を見上げ、

「うん。そうだね」

あどけなく笑った。そして前方に拳を突き出しながら、

「目指せ、お宝！ 目指せ、賞金！ 目指せ、『アクアマグロ』！」

……こいつ、マグロのことは忘れてなかったか。……と言つか、さっきの無言は実はマグロについて真剣に考えていたから、なんてオチはないだろうな？

内心で苦笑いしていると、ふいにルーが珍しくも真面目な顔を俺に向けてきて、

「それよりさ、ダルク」

「何だ？」

「ダルクってさ、その——ワイトと仲いいの？」

………は？

唐突な質問に、俺は少々戸惑いながら、

「いや……別に、よくもないし、悪くもないけど——何でいきなりそんなことを？」

俺の質問返しに、ルーは拗ねるような顔つきで、

「だって昨日、ワイトの話してた時、ダルクってばやたら真剣な顔してたじゃん。まさかワイトみたいな娘がダルクのタイプなんじゃ

——」

「しっ！」

いきなり、前方からロットの鋭い声。振り向くと、ロットが前を睨みながら左腕で俺たちを制している。

俺とルーも慌てて声を潜め、立ち止まった。

「何だ？」

「前の方から気配がする」

ロットが真剣な表情で前方に目を凝らしている。その視線を追っていくと、百メートルくらい先、暗闇の中、壁に光がほのかに揺れている。

……よくもまあこんな距離から気付けたもんだ。相手からの殺気があるならともかく。

見つめている先で壁が右側から照らされている。恐らくあの地点

で道が右に曲がっているんだろう。そして曲がったその先に 何かがある。

俺たちは足音を立てないように静かに進み、曲がり角の直前で立ち止まった。

壁際、ロットは背中でもたれかかりながら、俺たちに無言の頷きを返した。そして背中の大剣の柄に手をかけながら、勢い良く身を翻す。

「誰だ！」

と、ロットが前を向いた瞬間、襲い掛かってくる影。ロットに向かって腕を振り下ろしてくる。

ロットは剣を抜き、その攻撃を受け止めた。

鳴り響く金属音。

俺とルーも武器に手をかけながら、その影を確認すると、

「……！ お前——ワイト！」

その影は白髪ショートヘア、ダボダボのパーカーで、ロットにクローを突き立てている顔なじみだった。

「あなたたち……だったの」

ワイトは静かにそう言いながら、クローを引いた。

その青白い肌がこの遺跡の薄暗い照明具合と相まって、これは実は幽霊か何かじゃないのかと頭の片隅で疑いつつ、俺は自分でも分るくらい呆然とした声音で、

「ワイト、お前何でこんなところに——」

「ワイト！ どうしました！ 何です、今の音はっ！」

奥から、またも聞きなれた声。足音と共に暗闇から現れた二つの影は、ワイトのチーム、ウェリィとギーンだった。

駆けつけたウェリィが目を丸くしながら、

「おや、まあ、あなたたち。どうしてこんなところへ？」

「それはこっちのセリフよ！ あんたたちこそ、何でこんなところにいるのよ！ まさか、あたし達をつけてきたんじゃない」

「そんなことはいたしません。この遺跡調査の仕事を請負ったので、

その任務を遂行しているだけです。……あ、まさかロットさん。何だかんだ言ってやっぱりわたくし達のチームが気になって、同じ仕事を請負ったのですね？ うふ。何ていじらしい」

「そんなわけないでしょ！ ただの偶然よ。勝手なこと言わないでよ、スパゲツティ頭！」

そのセリフを聞くや否や、ウェリイはぴくつと眉間にしわを寄せ、右手に握っていたロットを振った。バチツと言って、ルーの目の前に火花が散る。

ルーは驚き、仰け反りながら、

「わっ！ な、何するのよ！」

「その言葉を言わないでくださいと、昨日も言ったでしょう？ 聞き分けがなくてよ。それにこちらも遺跡調査に来たというのなら、残念ながら商売敵ということになってしまいます。わたくし達は賞金をただでそちらに譲ってあげるほどお優しくはないのです」

「それはこつちも同じことよ！」

言いながらルーは『サイキ』を取り出し、ウェリイに向けて撃った。

しかしウェリイは首を左に倒し、難なく弾を避ける。軌道を読みきっていたんだろう。彼女の後方で、パキパキツと壁が凍った。：

…ルーが今撃つたのは『青石』の弾か。

ウェリイは小バカにした笑顔と共に身を翻し、

「うふふふ。まだまだ甘いですね。では、私は先に行かせて頂きます」

そう言って奥へと駆け出した。

「な、ま、待てーっ！」

叫びながら追いかけるルー。

「……撃たせないわ」

呟くように言ってから、ワイトも駆け出した。

「むっ！ いかん！ お宝を先にとられてしまう！ 急がねば！」
ロットまで駆け出し、闇に消えていった。

後に残されたのは、俺とギーンのみ。

「……行っちゃったな」

「……行っちゃいましたね」

「どうする？」

「とにかく追いかけましょう。はぐれるのは危険です」

「そうだな。どら、行くか——それにしても、君らもこの『遺跡調査』の仕事、請負ったんだ？ この前あんだだけ愚痴ってたのに」

「ええ。お姉ちゃんが聞かなくて——あなた達も請負ったんですね？ 『遺跡調査』は無駄骨な仕事だって、あれだけ言ったのに」

「ああ、ロットとルーが聞かなくてな——それにしてもどう思う、この遺跡？ 何かありそう？」

「発見されたばかりの遺跡なので、何とも言えませんが。逆に言えば、六人がかりで探せば何か一つくらい見つかるかもしれません」

「……そうだな。六人で手分けして、報酬を山分けにしたほうが賢いってのもんだろう。万が一二つ見つければ、それを分ければいいわけだし」

「そうですね。だけど三つ目まで見つかりとまた喧嘩になりそうですから、二つ目を見つけたら即解散した方が、丸く収まるんじゃないでしょうか」

「そうだな。とりあえず、あいつらに遺跡の中のを壊されちゃヤバイし、追いかけてようか」

「はい」

俺とギーンも詮無く歩き出した。

歩きながら、右手の甲で壁をとんと叩いてみる。鈍い音がするだけ。見かけによらず、この壁は案外頑丈に作られてるのかもしれない。

手に着いたコケを払いながら、俺はギーンの隣を黙々と歩いている。

四人とはぐれてからさらに十分くらい歩いたが、一向に追いつかない。まあ、向こうはダッシュしててこっちはとぼとぼ歩いてるんだから、当たり前と言えは当たり前だ。しかしあいつらは一体どこまで行っただんだ？

だがとりあえず、あいつらがこの道を通ってさらに奥に向かったことは間違いない。なぜなら所々壁が焦げていたり、凍っていたり、刀傷がついていたりするからだ。パンくずを落としていくのより数倍分りやすいマーキングだ。

とにかくあいつら、大事なものは壊さないでくれよ、と祈りつつ、「この遺跡、一体どれくらい前に作られたんだろうか？」

何ともなしに俺が言くと、ギーンは周囲を眺め回しながら、

「もつとも古いこの辺りのマッピングデータは六百年前のものです。それ以降、定期的にこの山の地図は書き換えられてますが、しかしこんな空洞のデータはまったくありませんでした。つまり、この遺跡は六百年以上前に作られた可能性が高いということですね」

「ふん。もしかして《てくのろじ》の時代？」

「いえ、その時代の建造物なら、鉄などを使ってもつと頑丈に作られているでしょう。この遺跡はただ石と粘土を積んだだけです。《てくのろじ》衰退以後に作られたと考えるのが妥当でしょう」

「《てくのろじ》の後、六百年以上前か……。それって、『石』が発見される前だよな？ ろくな動力もなかったらうに、よくもまあこんなもん作ったもんだ」

「ええ。裏を返せば、それだけの労力を注いでも守りたいものがこの遺跡にあるということです。この遺跡が発見されてから今まで、三十チームくらいの調査団がここに入ってますが、今のところそこまでの発見はありません。もしかしたら、チャンスはあるかもです」

「へー」

……なるほど。さすがギーン。下調べはバッチリ、分析も納得できるものだ。相変わらずのアナリシストっぷりだ。

俺が、

——ロツトの大剣に一目置いているように、
——ルーの銃に一目置いているように、
——ウェリイの統率力、意思決定力に一目置いているように、
——ワイトの身のこなしに一目置いているように、
ギーンに一目置いているのが、この『分析力』。
何らかの情報を与えれば、そこから推測される最も確かな結果を出す。成り行き、問題点、その打開策。賞金稼ぎみたいな先の展開が予測しづらい仕事では、まこと重宝する能力だ。ウェリイもいい弟をもったもんだ、もっと労わってあげて欲しいね、と思っていると、

ドドドドドドドッ

奥から、うなるような地響き。

「な、何だ？ 地震？」

「いえ、初期微動を感じませんでした。震源が物凄く近い可能性もあります……。しかしこの場合、もっと可能性の高い事象があります」

「何？」

「この遺跡のトラップです」

ゴゴゴゴゴゴゴッ

なおも地響きが鳴り続けている。というか、音も振動もだんだん大きくなってきている。

「トラップねー。どんなトラップだと思う？ 物凄く嫌な予感がするんだけど……」

「そうですね。段々音が大きくなっているところから察するに、何かがこちらに向かっていているのでしょう。そのトラップがこの世の物質を用いて作られている以上、固体、液体、気体、プラズマのどれかになるわけですが。固体の場合は岩石、液体の場合は水、気体の場合は毒ガス、プラズマなら炎と言ったところでしょうか？」

と、

「——」

奥の方から叫び声が聞こえてくる。地響きにかぶさって、誰の声なのかまではよく分らないが。

さっさと後ろに走り出そうか、それとも一応トラップが何なのか確かめておこうか迷っている内に、その声も段々近づいてくる。それに伴いその声の主も判別できて、予想通り、ロットとルーとウエリイだった。

「うわーっ！」

「あわわわわっ！」

「きゃーっ！」

「……………」

無言なのはワイト。

こっちに向かって駆けて来る四人の姿がようやく判別できるようになって、さらにその後ろに目を凝らしてみると、

「ゲッ！」

濁流だった。

第七話

結局俺たちは、一時間かけて歩いた道のりを十分弱で逆走したわけだが、途中でへ口へ口になったルーをロットが背負って走ったおかげで、六人ともどうにか無事に脱出できた。

鼻先に肉を吊り下げられたライオンのように俺たちを追ってきた濁流は、最終的に遺跡の入口まで流れ込んできて、入口付近は水浸し。壁に寄りかかって昼寝に興じていたアンディさんを大いに驚かせた。

その後も水はしばらく流れ続け、引いていくまで二時間ちよつとかかった。その間にウェリイたちは彼女らの責任者に報告に行き、俺とアンディさんは、俺たちが何でまたこんな死にそうな目に遭ったのか（遭わされたのか）、ロットとルーから報告を受けた。

——そして、

「ふーむ。つまり、ロットがワイトちゃんに剣撃をお見舞いしようとしたところ、うまくかわされ、壁をぶつ叩いてしまった。するとその壁がへっこみ、隣の壁に扉が出現。そこから水が溢れてきた……と。そういうわけか？」

腕を組みながら、ロットに確認するアンディさん。それを受けて、「はい、そうです」

神妙に頷くロット。

……やっぱり元凶はこいつだったのか。そんなことだろうとは思っていたが。

ジロリと聞こえてきそうなくらい強く睨んでやったが、ロットは俺の怨念のこもった視線に気付く様子もなく、ひょうひょうとした顔でアンディさんに向かい合っている。

「その扉の向こうは奥に繋がっているような雰囲気でしたが、いかんせん非常事態だったので確認できませんでした。水が完全に引いてからもう一度調べる必要がありますな」

「そうだな。そんな隠し通路があるなんてことは、機関からは聞いてないからな。うん。恐らくこれは新しい発見だ」

「新発見だってっ！ やったーっ！」

飛び跳ねて喜ぶルー。

……ついさつき死にかけたつてのに、気にしてる様子は全然ない。まあ、ルーらしいつつちゃあるらしいが。

事情を完全に把握し、納得が言った様子のアンディさんは、腕をほどこしながら、

「おし、ご苦労さん」

と言いつつ、表情を和らげて――

「――うん、お前らの仕事はこれで終わりだ」

「え？」

アンディさんの発言に、きょとんとするロットとルー。

一拍置き、ロットが慌てて、

「な、何ですか？ まだお宝を見つけたわけじゃないんですよ？

今日はもう遅いですが、明日また我々が深部まで調査しますよ」

「そ、そうだよ。あたし達もつと探すよ」

不満顔で抗議する二人。

しかしアンディさんは首を横に振りながら、

「いや、残念ながらお前らじゃ役不足だ」

きっぱり言った。

「ここからはプロに任せる。遺跡調査を生業としてるような賞金稼ぎにな」

ロットは口元を歪めながら、

「……私たちは役不足……ですか……」

そう呟き、そして沈黙。それ以上言い返せなくなった。

しかしルーはまだ受け入れられない様子で、わたわたと

「ど、どうして……隠し部屋を見つけたからって、そんな……いき

なり……」

「正味な話、この遺跡は、この二週間でプロによる調査はあらかた済んでたんだ。機関によっちゃ遺跡のマッピングも済んでるところもあるって話だ。だからこれ以上厳密な調査をしても得るものは少ないと判断して、お前らみたいに安い金で動く賞金稼ぎを雇ったわけだ。しかし、さらに深部があるとなると話は変わってくる。また厳密な調査が必要になってくる、プロの調査が必要になってくる。だから、お前らはしばらくお休みだってことだ」

「で、でもでも、いきなりそんな、納得できないよ！　ここまでやつたんだよ？　あたし達が続けて調査したって、別にいいじゃない！」

強い口調でまくし立てるルー。いつもは成り行き任せのルーが、今回は珍しく食い下がる。何でルーが引き下がらないのか？　……まあ、考えるまでもない、か。

その焦燥感のこもった顔に何か感じたのか、アンディさんはふつと息を吐き、厳しい表情でルーを静かに見据えた。そして静かな口調で、

「じゃあお前に、この遺跡がいつ建てられたのか、調べられるか？」
「……………」

反論できなくなるルー。

「石の調達先は？　粘土の成分は？　作成方法は？　住んでた人間の文化は？　食生活は？　信仰は？　言葉は？　そういうもんをお前らに調べられるのか？　出来るのか？　出来ないだろ？　だからそういう知識のある人間にバトンタッチするって言ってるんだ。おまけに、だ。お前ら、さっき死にかけたんだぞ？　掛け値なしに。不注意でトラップを作動させて、な。お前らにはトラップを事前に発見し、回避するスキルもない。賞金稼ぎを始めて三年足らずのお前らじゃ経験不足なんだ。お前らのことを考えても、交代するのが妥当なんだよ」

いつもの笑顔は失せて、真剣な顔で話すアンディさん。

その視線を受け、ルーはしばらく黙っていた――が、ふと視線を地面に落とし、

「……わかりました」

消え入りそうな声で言った。

アンディさんはその返答に鼻を鳴らして、

「ま、隠し扉を見つけただけでもめっけもんだ。お前らにもちゃんと金に入るだろう。プロの調査が済めばまたお前らに声がかかるだろうし、とりあえず今は静観しとけ。な？」

「……………はい」

呟くように言って、そのままルーは回れ右。山を下る道をとぼとぼ歩き出した。

「あ、おい！ ルー！ 待て！」

慌てて追いかけるロット。二人とも、どんどん離れていってしまふ。

俺は下り坂を遠ざかっていく後姿を横目で見つ、アンディさんに向き直って

「じゃあ……俺たちはこれで失礼します。今日はありがとうございました」

「いや、なに、今回お前らが危険な目に遭ったのは、俺が樂觀視してたせいもあるからな。あんまり強くは責められんが。……しかしこれからは気をつけろよ？ ま、お前なら大丈夫か。うん、また何かあった時はよろしくな」

「はい」

俺は軽く会釈をして、二人の後を追った。

昼間に取っておいた宿屋の一室。日はすでにとっぷり落ちていて、満月が窓から覗いてる。

俺たち三人はテーブルに向かい、昼に食い損ねた弁当を口に運んでいる。

装飾が微塵もなく、ベッドが二つとちっこいテーブルがあるだけの部屋。たいして稼ぎの多くない俺達には一端のホテルを取るほどの甲斐性はなく、必然的にこういう安さだけが売りの宿泊場に押し込められることになる。

この部屋にベッドが二つなのは、ここで寝泊りするのが俺とロットだからであり、ルーの部屋は左隣の一人部屋だ。しかしだからって食事の際、三人だけのチームで一人仲間外れにする意味などあるわけもないので、三人集まって夕食をつついていたのである。

ちなみにアンディさんの部屋は右隣だが（アンディさんは金は十分持つてはるはずだが、部屋の良し悪しなど気にしないタチのようで、「面倒くせえし」と言って俺達と同じ場所に宿をとった）、物音一つ聞こえない。今日の成果を雇い主に報告に行ったつきり、まだ帰ってきていないようだ。

さつきから引続きしょんぼりした顔をしているルーは黙り込んだまま箸を動かすだけで、加えて俺にも別段ロットと話したい内容はなく、この部屋まで偶発的に静かになっている。モクモクという音しか聞こえない。

俺の横でお茶をすすっているロットに続き俺も弁当をたいたらげ、お茶を手にとろうとした際、ふいに

「あのさ、ロット、ダルク——」

箸を止め、ルーが口を開いた。

「——あたし、今夜あの遺跡を調べに行こうと思うの」
俯いたまま、いくぶん迷いの見える口調で言う。

ロットはその発言の真意を推し量るようにしばらく黙り込んだ後、手に持っていたコップをテーブルに置き、腕をひざに乗せた。そして難しい表情で、

「しかし、もうあの遺跡の調査は交代だと言われただろう？」

「だから、仕事とは関係なくよ。別に宝を見つけに行くんじゃない。ただ遺跡を見に行くだけ。何かあるのかを見に行くだけ」

「ルー、お前、何でそこまであの遺跡にこだわ——」

「『銀石』があるかもしれないから、か？」

ロットの言葉を遮り、俺はルーに尋ねた。

ルーは俺と視線を交差させ、コクリと無言で頷く。

それを見て、ロットは「ふーむ」と腕を組んで背をもたれながら、
「しかし、たとえ『銀石』を見つけても持ち出せないだろ？　いくら素人の我々が注意しても、プロにかかればすぐばれるだろうしな。それでは泥棒になってしまう」

「別に『銀石』を横取りに行くわけじゃないよ。探しに行くだけ。見に行くだけ」

「ならばなおさらだ。そのうち調査結果が公表されれば、遺跡に何があったのかわかるだろう。わざわざ我々が行く意味なんて——」

「早く……早く見たいの。早く知りたいの。せめて、あるかどうかだけでも。それに、情報が公開されないかもしれないじゃない。『銀石』って、すごく大事なものなんだから——もちろん、『銀石』がどういう『石』なのか、直に見てみたいのもあるんだけど」
ルーは俯きながら、いつもより低いトーン、意思がこもった口調で答えた。

それを聞いてロットは、口をへの字にしてしばらく考え込むような顔をする——と、ふいに肩をすくめ、

「……よし、わかった。私も行こう」

不敵に笑った。

「タダ働きはタダ働きだが、遺跡に不法侵入というのも、それはそれでおもしろそうだからな。ふふふ」

それを見て、ルーの表情が少し緩む。ロットはニヒル笑いのままコクリと頷いた。そして、自然と二人の視線が俺に向けられる。

……正直なところ、俺はまったく気乗りしていない。金にならないのに疲労をためて、さらに徹夜する羽目になるのはいい迷惑だ。それに残念ながら、俺は『銀石』に対してそれほど興味も関心もない。つまり、俺にとってこの行動には何のメリットもないのだ。

しかし、今俺にこいつらを止められるのか？

いつもの考えなしな行動なら縛り付けてでも止めるところだが、今回はそういうわけではない。ちゃんと 意思 がある。しかも、俺もルーの事情を知っているだけになおさらだ。

この行動を知らん振りしても、チームを組んでいる以上、この二人が問題を起こした場合——この二人は問題を起こす可能性が高いのは言うまでもないことで——俺も連帯で責任を取らされることになるだろう。ここで二人と手を切るというのも、長期的に見ればデメリットの方が大きい。ロットの大剣もルーの銃も、それなりに重宝しているのだ。

では、一緒に行動を取るように見せかけて、二人に悟られないように故意にアンディさんに気付かせる、という手はどうか？

……正直、俺にそんな微妙かつ繊細な演技が出来るとは思えない。この二人に気付かれてしまったら元も子もないし。

二人に視線をぶつけられつつ、「俺にとって一番メリットが大きくなる行動はどれか」と考え、俺は結局一つの結論に到った。

——俺がこいつらの監視役、及び抑止力になるしかない。

面倒だが、それが一番いい選択肢だ。考えればもつといい案も思い浮かぶかもしれないが、現時点で考え付く限りでは、それしかない。

俺は嘆息しながら、

「わかった。俺も行くよ」

と答えた。

するとルーは邪気ない笑顔で俺とロットを交互に見、

「ありがとう！ 二人とも！」

第八話

深夜一時半過ぎ。俺とロットとルーの三人は、遺跡の入口にたどり着いた。

いくら夜中にこの遺跡に来る予定だったとは言え、なぜまたこんな遅い時間になったってしまったのかその理由というのは、単純にアンディさんの帰りが思いの外遅かったからである。

男部屋に三人が集まり、真つ暗な部屋の中でじつと聞き耳を立てていたわけだが、右隣の部屋からドアの開く音が聞こえてきたのはすでに十二時を回った頃。その後しばらくはこそこそ言う音が聞こえていて、ようやく完全に静かになったのはさらに三十分後だった。そこから山を登り始めたので、結局この時間になったのである。

いい加減眠いが、しかしぼんやりしている暇もない。

俺達は来たときと同様、帰日もアンディさんにはれないように宿に戻らなければならないのである。アンディさんの睡眠時間が六時間程度だとすれば、俺達が遺跡を探索できる時間は正味三時間。隠し扉にたどり着くまでにさらに一時間以上かかることを考えると、決して十分な時間とは言えない。

だが、たとえ『銀石』を見つけられなかったとしても、時間が来れば否応なく引き返さなければならぬのは必定。歯止め役である俺が、その辺に注意する義務を負うことになるんだろう。

そんなことを考えつつまぶたをこすっている俺とは対照的に、普段の就寝時間が三人の中で一番早いであろうルーは——焦燥感に駆られているせいか——眠そうな顔は全然見せていない。逆に切羽詰った表情で、

「さ、早く入ろ」

とずんずん進んでいく。その後ろを、

「そう慌てるな」

と『赤石』を取り出しながら、ロットがついていく。

……ま、ここまで来たら行くしかないだろう。

半分諦めの混じった決意をしつつ、二人に続いて俺も遺跡入口の石畳に足を踏み出そうとした、その瞬間、

いきなり、ロットがルーの襟首を掴み、後ろに引つ張った。

「ぐえっ」と言いながら、ルーが俺の横に転がったのと同じ、遺跡の奥から影が飛び出してきた。

次の刹那、カンツという甲高い音が回廊に鳴り響き、ロットの剣と影の刃が交錯しているのを目視、俺はそれが敵であることに思い至った。

俺は慌てて遺跡の外に跳び出す。目の端でルーもわたたと這い出してきた、ロットも後ろに跳んだ。それを追うように、その影も夜空の下に現れる。

月明かりに照らされたのは、動きやすそうな布装束を纏い、顔全体を黒いマスクで覆った、剣が入りそうな大きさの道具入れを背中に携えている、大人の体躯をした人物。そいつが俺達に相対し、ナイフを構えている。

そのナイフ、良くは確認できないが、光の反射が普通のものと違う気がする。さっきの打ち合いの音も金属音とは思えなかった。特殊なナイフらしい。十中八九、『石』が使われているものなんだろうが。

ヒュンツ、と風を切る音が聞こえ、影が前へ駆け出してくる。その先はロット。

敵はナイフを、ロットの胸部に突き出した。ロットは体をよじり、これを避ける。敵は残像が見えるほどの速さでナイフを引き、また同様、ナイフを突き出す。ロットは体勢を崩しながらも、横に飛んでこれかわした。しかしその着地点、敵はさらにナイフを突き出す。ロットは慌ててしゃがんだ。髪が数本持つていかれている。

低い姿勢のまま、ロットは右ひじを引き、そのまま『グレン』で

突く。しかし敵は上体を傾げるだけでこれを回避。逆にその体勢まま、四度目の攻撃を繰り返してくる。

「くっ」

と言いながら、ロットは攻撃をかわしつつ大きく後ろに跳び、敵と距離をとった。

やはり、暗闇というのが災いしている。攻撃がはっきり見えないため、ロットはほとんど敵の攻撃を受けることができていない。余裕を持ってかわすことしかできていない。そして、この余裕に費やす浪費が、決定的な差になっている。

どうやら敵は、こういう状況に慣れているようだ。さっきのロットの攻撃も、数センチの間隔だけで避けていた。この暗闇でも、攻撃が完全に見えているのだ。

圧倒的にこっちが不利だ。三人で同時に攻撃を仕掛けるしかないと思っっている俺の横、カチャツと言う音が聞こえた。見ると、ルーが『サイキ』を構えている。

俺がルーに視線を向けたのと同じ、敵がこっちに駆け出してきた。その視線は、完全にルーに向いている。

「わっわっ」

いきなりの標的変更に、ルーは困惑。構えている銃口がぶれている。

敵がルーに向かい踏み込んだそのタイミングで、俺はルーを横に突き飛ばした。

「わわっ！」

ルーの首があった空間で、空を切る敵のナイフ。そして俺は敵の懐に入りながら、右手に握った『ムゲン』で、

躊躇なく、思慮なく、考慮なく、遠慮なく、

敵の心臓部めがけて、刃を突き出した。

しかし、手ごたえはなかった。ブンツ、という音だけ。眼前では、敵の残像だけがぶれている。

視線を下に向け、そこで体勢を低くしていた敵と目があつた瞬間、俺の鳩尾に激痛が走る。

足に力が入らない。ひざに力が入らない。腰に力が入らない。手に力が入らない。腕に力が入らない。肩に力が入らない。首に力が入らない。

段々地面が近づいてきて、

——そして、俺の意識は落ちていった。

第九話

俺は目を開けた。

視界に映るのは、白い——天井。

首を右に回すと、窓から外が見えた。民家の屋根と、青空、太陽。わかったのは、今が日中であること。

——うん？　ここは、どこだっけ？

俺は上体を起こした。

テーブルの上に、時計を発見。短針が三、長針が十二を指している。言うまでもなく、今は昼の三時なんだろう。

辺りを見回すと、ここは殺風景な一室。

「はて、俺は何やってたんだっけ？」

呟きながら、俺は記憶を掘り起こす。

ルーが「遺跡調査」の仕事を取ってきたこと。馬車の停留所でアンディさんと落ち合ったこと。俺とロット、ルーの三人で遺跡の調査を開始したこと。遺跡内部でウェリィ、ワイト、ギーンと出くわしたこと。濁流に追われたこと。アンディさんに「役不足」と言われたこと。深夜、三人で遺跡に侵入しようとしたこと。そして、そこで——

——敵に襲われたこと。

俺は慌てて、腹部に手を当てる。……触っても、痛みはない。Ｔシャツをたくし上げて目で確認してみるが、傷どころか、アザすらできていない。

……やはり、あの攻撃は蹴りだったのか。

あの時は見えなかったが、感触や衝撃から、何となくそうは思った。ナイフによる攻撃じゃなくて、本当良かった。

いや、敵は三人を同時に相手していたんだ。たかが一瞬でも、ナイフを使用不能にする隙を作りたくなかったんだろう。まあ、運が良かったことには変わりないが。

しかしこの現状、俺が見覚えのある宿にいることから考えて、敵に捕らえられたり、既に殺されたわけではないだろう。天国がこんな殺風景な場所じゃなければの話だが。……地獄が、こんな心に易い場所であるわけもない。

再度部屋を見回してみたが、やはりここには俺しかない。……他の二人はどこに行ったんだ？

と、壁の向こうからぼそぼそと話し声が聞こえる。

この部屋は、俺とロットが泊まっている部屋。そして壁の向こう、この部屋の右隣は、確かアンディさんの部屋だったはず。

俺は部屋を出て、廊下を直進。隣のドアを開けた。

目の前に開かれたのは、俺達の二人部屋よりそこそこ広い三人部屋。

……そうだった。アンディさんは、一人でこのただっ広い部屋に予約したんだっけな。別にアンディさんが希望したわけではなく、ここしか空いてなかったからというだけだが。しかし「面倒くさい」というだけで一人で三人部屋を取ってしまう辺り、俺達とは懷事情がだいぶ違うがね。

壁際にベッドが三つ並び、その奥の窓際にテーブルと椅子が並んでいる間取り。そしてそこには、ロットとルーとアンディさんの三人が向かい合って座っていた。

「あ、ダルク。目え覚めたんだねっ」

ニコツとするルー。

「ああ、覚めたことには覚めたが、何で俺がここにいいのかはさっぱりだ」

言いながら俺は部屋の中に歩を進めた。残念ながら椅子が余ってなかったので、ベッドの上に腰掛ける。

「その問いに答えるのは造作もない。私がお前をここまで背負ってきたからだ」

ロットが薄く笑いながら答えた。

「ほう。てことは、あの敵は倒したか捕まえたか追い返したかした

ってことか？」

俺は感心しながら言ったが、しかしロットは苦笑いで視線を落とした。

「いや、むしろ殺されそうになった。アンディさんが来てくれなければ、あの山が我々の墓標になっていたところだ」

——墓標とは、これまた縁起でもない表現だ。しかし、それが決して冗談ではなかったことに思い至り、俺の背中に冷たいものが走る。

「アンディさん……………来てくれたんですか？」

俺がアンディさんに視線を動かすと、

「ああ。夜中トイレに行こうとしたら、お前らの部屋から気配が一つもしないんで、もしやと思ってな。遺跡に行ってみたら、案の定だったってわけだ。ったく、神がかり的なタイミングの良さだったぜ」

「じゃあ、アンディさんがあいつを倒したんですか？」

「いや、まんまと逃げられたよ。奴が俺の視界に入った三秒後には、完全に逃げの体勢に入ってやがった。あの様子は、完全に俺を警戒してやがった。ま、今日この村に俺がいることは、わかりきってたことだったろうからな」

自嘲気味に笑うアンディさん。

「……………じゃあ、あいつが何者なのかとか、全然わかってないんですか？」

「まーな。結局あれからわかったのは、あいつが遺跡から何かを持ち出したってことだけだ」

「え？ もう確認したんですか？」

「ああ。今日の午前中にプロの調査団が遺跡に入って、確認した。あの遺跡の隠し部屋から、宝石箱くらいの大きさの何かが盗られたことが、な」

「今日？ え？ ちょっと待ってください。俺達が襲われたのって、昨日と言うか、今日ですよな？」

「ああ、そうだ」

「それにしちゃ、行動が迅速ですよ。半日後にはプロの調査が済んでるって」

アンディさんは嘆息しながら、

「俺が昨夜の内に頼んでおいた連中だよ。昨日はお宝探しを頼んでたんだが、無い物探しに目的が変更しちゃった。すぐに確認できたのは、ま、悪くはないことだったが、な」

……そうか、そうだよ、そうだよな。当たり前だ。寝起きのせいで、頭が良く回っていない。

「なるほど……ね」

状況を飲み込み、俺は呟きながら大きく息を吐いた。

と、

「あの……アンディさん」

小さい声で、ルーが言葉を発した。

「あん？」

「その……あたし達のこと、怒らないの？　もしくは罰とか、報告とか……」

「何で？」

眉を吊り上げるアンディさん。

「だってあたし達、アンディさんに黙って遺跡に入ろうとしたから……。昨日、危ないって注意されたのに……」

尻すぼみに言葉を続けるルー。アンディさんは一瞬きょとんとした顔をしてから、息を噴き出し、

「くはははははは。そうか、そういうことか。やけに沈んだ顔してると思ったら。くははははははははは。そうか、そうか。くくくく。いや、なに、簡単なこった。これは俺の責任だからだ」

「え？　アンディさんの……責任？」

ルーは首をひねる。

「そうだ。俺がこの遺跡調査の責任者。そしてお前らは、昨日俺が解任した時点ですでに部外者だ。何のともねえ。つまり、本当は

俺があの遺跡を監視してなけりやいけなかったんだ。侵入者がいなか、俺が見張るべきだった。しかし、まさかあんなタイミングで盗賊が出るなんてあり得ないと、樂觀視——またしても、樂觀視——しちまったせいで、あいつの侵入を許した。許しちまった。通常なら、俺は調査団が無い物を確認するまで、あいつの存在にも気付かなかったわけだ。だがしかし、お前らのおかげで早く発見できた、発見を早くできた。しかも、あいつの外見を一瞬目にできた。だから別に、俺にお前らを怒る理由も資格もねえんだ。むしろお前らは褒められるべきだ。よくやったぜ。くははは」

「……そうなんですか」

逆に呆然とするルー。

「しかし、このタイミングの良さ——いや、悪さか——はねえよな、ったく」

舌打ちするアンディさん。

「タイミング？ どういうことですか？」

俺が聞くと、アンディさんは「つまりだな」と肩をすくめ、

「いくら樂觀視してたとは言え、俺だってさすがにそこまで気を抜いてたわけじゃねえんだ。周囲にはずっと気を配ってた。あの、お前らが濁流に追われて慌てて出てきた時もな。あん時やさすがに驚いたが、それでも警戒は解いてねえよ。俺達を觀察する視線があれば、間違いなく俺は気付いたはずだ。んで、さっきこいつらから話を聞いた分には、お前らは外で隠し部屋の話はまったくしてないんだろ？ 向こうだって、責任者が責任者だ、あいつらから情報が漏れたなんて考えられねえ。つまり、敵は隠し部屋があるなんて知ってるわけねえんだよ」

「……そうか……そうですね」

俺は無意識に頷く。

「つまりあいつは、わざわざ隠し部屋を狙ったわけじゃなくて、偶然今日、あそこに進入したことになる。しかも、だ。ロットが隠し扉を開く前なら、あいつもそれに気付けなかったかもしれない。しか

し昨日お前らが見つけたせいで、開けっぴろげになっちまった。本当、タイミングが良い——いや、悪い——よな。俺の責任じゃねえ、運が悪かったただけだ、って言いたくなるぜ」

肩をすくめるアンディさん。

アンディさんが話し終え、数秒、部屋に沈黙が流れた。各々、事の流れを整理し、思い返しているんだろう。最悪の結果ではなかったが、最善でもない。四人それぞれ、反省するべき点が少なからず存在する。

静寂の中、俺はこれからどうしたもんかと考えてると、

コンコンッ

ドアが叩かれた。俺たち三人は一瞬びくつとした後、そのままきよんとする。そしてロットがすくつと立ち上がり

「開けてもいいですか？」

とアンディさんに尋ねる。アンディさんは椅子に反り返ったまま何ともなさそうに、

「ああ、頼む」

ロットはその返事を受取ると、ドアの前まで行き、扉を内側に開いた。

ドアの向こうに立っていたのは、黒髪のロングヘアに黒ぶち眼鏡、黒いコートを着た——二十代後半くらい？——の女性。少々目つきの悪い顔で——仕事ができそうなタイプという印象は受けたが——佇んでいる。

その人はすつとお辞儀をしながら、

「こんにちは。私は今回ウェリーのチームの責任者を務めていました、リンク・レバークと申します」

涼しげな声で言う。

「ああ、あなたも賞金稼ぎの方ですか？」

ロットが尋ねると、

「いいえ。私はギルド本部に所属している者です。言ってしまうと、ただの公務員ですが」

表情は崩さず、言葉を続けるリンクさん。

……そうか、そうだった。本来、こういう集団で行動をする仕事の責任者は、ギルド本部の人間が請負うのが通例。文字通り、経営者として責任を負っているんだから。

しかし、集団の仕事すべてに本部から人材を派遣しては、人員が足りなくなってしまう。全世界には何万件という依頼が飛び交っているのだ。なので、ランクで上位の人間——つまり、仕事に関して多大な信頼がある人物——にそれを任せることがある。それが、今回のアンディさんのケース。何と言っても、ランク十番台の賞金稼ぎなんだ。

一説によると、ランクが二十位以上の賞金稼ぎには、実力差はほとんどないと言われている。実際に試したわけではないし、そもそもランキングは変わり行くもの、本当かどうかはわかりやしないが。では、ランキング上位者の実質的な差というのは、一体何なのか？

それは、金に対する執着心だと言われている。つまり、効率のいい仕事に絞って請負っていれば賞金も増え、逆にそれ以外にプライオリティを置く人は下になってしまう。それが、それこそが違いになる——らしい。

逆に十番台の賞金稼ぎの方が、金以外に大事なものを持っている分だけ度し難い、恐るべき、と言う人もいる。アンディさんの場合、確かに度し難い部分もあるけど、雰囲気的に恐るべきとは感じない、が……。

と、思考が横道にそれている内に、リンクさんはコツコツと部屋の中に歩を進め、アンディさんに向かい合う形で立ち止まった。アンディさんは笑顔と共に手をヒラヒラさせながら、

「どうも、リンクさん。本日はお日柄も良く」

「ええ、日和は良いですね。気分は芳しくありませんが」
相変わらず睨む目つきのリンクさん。

「で、今日伺った用件は、今回の件の事実確認です。報告書は受取りましたが、他にも何かあったことがありましたら、聞いておこ

うと思ひまして」

リンクさんは淡々と言葉を紡ぐ。アンディさんは「つれねーなあ」と苦笑いを浮かべながら、

「書いた通りだよ。今日の午前一時半頃、こいつらは遺跡から出てきた不信任人物と遭遇。そいつは布装束に黒いマスク、道具袋、そしてナイフを装備していた。俺がそこに着いた瞬間に逃げやがったが、盗られたものは、掌に収まるくらいの四角い物体」

「その中身は？」

「そんなのわからねえよ。宝石箱くらいの大きさだったから、中に入ってたのは宝石か、もしくは『石』か……。推測の域は出ないね」
「なるほど……。報告書に書いてあることがわかってるすべて、というわけですか。わかりました」

それだけ言つて、リンクさんはくるつと振り返ろうとする。

と、

「あ、あと、これも推測は推測なんだが――」

思い出したように、アンディさんが言葉を続けた。リンクさんはまた振り返る。

「はい？ 何ですか？」

「あいつが使つてたナイフは、恐らく『青石』で作られたもんだぜ。あいつのナイフがロットの服を掠めたところを見てみたら、いくらか湿つてたからな」

アンディさんは口元を引きつらせた笑みで言つた。リンクさんは顎に手をやりながら、

「なるほど……。それは厄介ですね」

「ああ。ああいう氷の刃を使われると、向こうのナイフにやあ刀傷は残らねえ。『石』が発動する度に刃も再生するからな。あいつを犯人と断定する証拠が一つなくなつちまうわけだ。この場合攻撃力は下がるが、しかし殺傷能力があることには変わらない。ああいう輩が良く使う手だ」

リンクさんは「ふむ」と息をつき、

「わかりました。それは重要な情報ですね。提供に感謝します。事件が進展すれば、またあなたに仕事を依頼することもあると思いますし、その時はよろしくお願いします」

軽くお辞儀をして、リンクさんは再度方向転換。そのまま部屋を出て行った。

廊下に響くヒールの音が聞こえなくなったところで、

「つたく、打ち解けづらいキャラだよなあ」

と、鼻で笑いながら呟くアンディさん。

「さて、これからどうすっかな？」

「あの——」

いくらか言いづらそうに、ルーが静々と口を開けた。が、

「おっと。お前らがその盗賊を追うつてのはなしだぜ？ 今回のこのセリフは、嚴重注意だ」

「……そうですか」

俯くルー。

「これはもう、遺跡探索の時とは次元が違う。トラップ云々とか、そついう問題じゃないんだ。もしお前らだけでやつを追えば、九分九厘、お前らは殺される」

「……………」

——殺される——というアンディさんの断定に、俺もロットもル
ーも、黙り込む。

「昨夜の戦闘でお前らも実力の差は実感してると思うが、話を聞くだけでも、そいつが手だれだって事はわかる。暗闇の中、あいつは正確にお前らの急所に攻撃してきたんだよな？ しかも、お前らの攻撃も最小限でかわしている。つまり、お前らの動きを完全に見切ってたわけだ」

ロットはゆっくり頷き、

「……そうですね。暗闇の戦闘ならばお互い攻撃の命中率は下がり、頭数でこっちの方が有利と判断して最初は『グレン』を発動させなかったんですが……」

そうだ、確かにあの時、俺の意識が存続してた間は、こいつは『赤石』を発動させなかった。あの刹那でそこまで考えが及んだとは、ちょっと驚きだ。なかなかの戦闘センス。ウェリイが惚れ込むのも、分らないでもない。ただし、こいつは一度褒めると成層圏まで付け上がるため、世界と俺自身の平穩のためにこいつを褒めることを自らに禁じているので、残念ながら俺はこの感想を口に出すことをしない。が――

「――ん？　じゃあ、あの後発動させたのか？」

俺の疑問に、ロットは再度首を縦に振った。

「ああ。あいつがお前に攻撃を加えている間に、な。私が奴に火炎斬鉄で攻撃しつつ、奴を炎で照らし、その明かりを頼りにルーが『レンキ』で狙い撃ちする、という陣形を組んだんだが」

「ほう。うまくいったのか？」

「いいや、戦況は変わらなかった。基本能力が違い過ぎる」

「そうか……。俺が倒れてなけりゃあ、少しはおもしろくなったかもしれないかったな」

「いや、敵がお前に気を取られている隙があったからこそ、私が『グレン』を発動させ、ルーがあいつと距離をとる時間ができたんだ。両方は成り立たないさ」

「……そうか、そうだな」

どちらにしろ、俺達が負けるのは時間の問題だったってことか。くやしいが、そういうことだろう。

アンディさんは俺とロットの問答が終わったのを見て取ると、嘆息しながら

「月明かりしかない中で敵の動きを正確に察し、しかも敵の急所を正確に狙うなんて、普通の人間にはできやしない。明らかにそういう戦闘になれている人間だ。まあ、俺にも同じことはできるが、逆に言えば同じことしかできない。精度の差もあるだろうが、どちらにしろお前らにとっちゃ大同小異だろう。お前らに勝ち目はない」
そしてルーの方に視線を動かし、

「ルー。お前があゝの遺跡——あるいはその中にあるもの——に思い入れがあるのは、何となくわかる。その顔を見てればな。だがあいつを深追いすれば、逆にそれに未来永劫手が届かなくなっちまうぜ。俺は四十、五十の先輩から見れば若造だが、それでもギルドでは筆頭に挙げられる賞金稼ぎだ。その俺から見ると、お前らは言うなれば雛鳥みたいなもんだ。巣を出て、飛び方の練習をしている雛鳥、まだ外界を知らない雛鳥。お前らは、これからどういう飛び方をしていくか、勉強している最中ってことだ。それを見守る俺は——柄でもねえが——親鳥つてところだろう。お前らが間違った方向に飛ばないよう、はらはら見守ってる心境だ。だから、お前らが飛び方を間違えないように言っておく。今は——少なくとも今は——あいつを追うのは止めとけ」

昨日と同じように——いや、もっと静かに、強い口調で——アンディさんは言い聞かせた。ルーは視線をテーブルに落とし、数秒沈黙を守った。

が、

「はい」

と、小さく答えた。そしてスクツと立ち上がり、

「じゃあもう、あたし達、帰りますね。荷物まとめてくる」

そう言って、トテテツと部屋を出て行った。その後ろ姿にロツトは首だけ向けつつ、「やれやれ」と言いながら、

「私達も帰る準備をしよう。明日からはまた、別の仕事に移るとするかね。しかし今回の仕事は、やけに長く感じたな。請負ってまだ二日というのが信じられん。なかなか疲れたし、な。さあ、さっさと帰って、さっさと休もう」

肩をコキコキ鳴らしながら立ち上がり、同じく部屋を出て行った。俺はその背中を見送り、視線をアンディさんに移した。

「……何かもう、色々申し訳ありませんでしたな。ルーのことといい。本当は俺かロツトが止めるべきだったんでしょうが」

「いや、なに。確かにルーのことも心配だが、それ以上に俺はお前

のことも危惧してんだ」

「……俺、ですか？」

はて？ 危惧される心当たりなんて、微塵もないが……？

「ああ。ラキのこともあるしな。ま、その様子じゃ、当分は関係なさそうだが。……さて、そろそろ遺跡の方に戻らねえと、またグチグチ言われそうだ。ほれ、この部屋鍵閉めっから、お前も部屋に戻って荷物整理しろ」

「あ、はい。じゃあ——昨日も言った気がしますが——本当にありがとうございました」

「おう」

ぺこっとお辞儀し、そのまま俺も部屋を出た。

——廊下を歩きながら考える。

アンディさんがラキと知り合いだったとは意外だ。一体どんな接点なんだ？ ラキが賞金稼ぎをしてたなんて話は聞いてないしな。確かに年齢は近そうだが……もしかして友達とか？

……まあ、どうでもいいさ。そんなこと、どっちだろうが問題ない。

俺には関係ない………はずだ。

第十話

「うん」

俺達の町の、ギルドの片隅のテーブル。

ルーが腕を組んで、口をへの字に曲げて唸っている。その視線の先、テーブルの上にあるのは仕事表。ルーはさっきからその表面を睨み続けているのである。

と、ルーはふーっと息を吐きながら腕をほどいた。そして、
「いいのがないね」

そう言いながら「やれやれ」と言わんばかりに掌を天井に向け、首を横に振る。その向かい側、椅子に背をもたれていたロットも、
「そうだな、全然駄目だ。『遺跡調査』ほどではなくとも、そこそこおもしろい仕事はあってもいいとは思うんだが……。少なくともここに載っているものは、総じてダメダメだな」

そんなことを言いながら、同じく不満面。俺はそんな二人の間に置かれている用紙に目をやった。そこに並んでいる文字を読んできると、

『探し人、行方不明の恋人——三百ドル』

『食材調達、ソノキダケ——五百ドル』

『図書館資料整理——百五十ドル』

といったものが並んでいる。客観的な視点に立つて言わせてもらえば、これらは実に堅実的で、その実割りがいい仕事ばかり。俺達のような駆け出しの賞金稼ぎなら、喜んで請負うようなものばかりである。なのに「いいのがない」とか言いやがるこいつらは決定的に価値観がずれている事を、今更ながら痛感する次第である。

まあしかし、こいつらにとってこれが普通と言えば普通だ。実力不足を理由に仕事を降ろされたばかりだというのに、ロットにもルーにもそれを気にしている様子はまったく見られない。それはそれで、よかったと言えばよかったが。

グランドル村からこの俺達の町『アステル』に帰ってきたのは、つい昨日の話である。その道中の馬車の中ではルーがだんまりを決め込んでいて、俺が仕方なくロットの話に相槌を打ってやるという図が三時間続いたわけだが、しかし一晩寝ただけでルーはすっかり本調子、朝にはこの通り、いつもの笑顔と口調に戻っていた。

けれども、このままではまた『遺跡調査』のような苦労と徒労の境界をかくくぐるような仕事に駆り出される可能性が高いわけで、今のこの二人の様子を果たして歓迎すべきか否か、俺がいよいよ本格的に悩んでいると、

カランカランッ

ベルの音。その音に反応してドアの方に目を向けると、ウェリイとギーンとワイトが入ってきた。ウェリイは俺達を見つけるや、開口一番、

「おや？ 弱小チームの皆さん」

勝ち誇ったようなニンマリ顔で言ってきた。そしてツカツカとこっちの方へ進んでくる。

ルーは洪面を作り、

「弱小言っとなっ！」

「弱小は弱小でしょう。盗賊一匹捕まえられないようで、よく賞金稼ぎなどやってられますわね」

頬を引きつらせた笑みを浮かべているウェリイ。ロットが苦笑いで、

「そう言っな、ウェリイ。あいつはかなりの使い手だったんだ」

「あら別に、私はロットさんのことを弱小と言ってるわけじゃないんですのよ？ ロットさんが一人で戦ったならばその盗賊も捕まえられたでしょうに。この二人が足手まといになったばかりに……」

見下した目線で言ってくる。俺にとっても少々癪に障る言い草だ。こいつはあの盗賊に相対してないからそんなことが言えるんだ。そんな偉そうなことは、やつの攻撃を直に受けてから言ってもらいたい。……しかし残念ながら、俺達は実際に盗賊を捕まえられなかつ

たわけだから、言い返す材料はない。

ルーはそっぽを向きながら、

「うるさいな。喧嘩してる気分じゃないのっ」

「私達もです。あなた方が不甲斐ないばかりに、私たちまで任務を外されたんですから」

「そ、それはあたしたちのせいじゃ——」

しかしルーの反論を聞き流し、ウェリイはさっさとカウンターの方へ行ってしまった。その後ろ姿を眺めながら、ルーは口を尖らせて「ふん」と鼻を鳴らす。

その横から、

「すいません、お姉ちゃんも途中で仕事を降ろされて、内心では少しライラしてるんですよ」

申し訳なさそうな顔で言ってきたのは、ギーン。

「本当はお姉ちゃんも、あなた方のせいではないのは分かっているんですが」

「お互い駆け出しの賞金稼ぎだ。思い通りに行かないことも多々あるさ。次にこんなことにならないよう、日々精進するしかないだろう」

「ええ。そうですね、ロットさん」

眉をハの字にした微笑のギーン。ふと、何かを思い出したような顔になり、

「あ、そう言えば皆さん、これ知ってます？」

「何？」

俺が聞くと、ギーンは一拍置き、そして口元を歪ませ、いくぶん声のトーンを落として、

「——例の盗賊が殺されたらしいですよ」

「……本当か？」

「ええ。さっき仕入れたばかりの情報ですが、そのうち噂も流され

るでしょう。パライト領土内の草原で、やつの死体が発見されたそうです。あなた方の証言の通りの服装でね。何でも『黒石』の刃で切られていたらしいですよ」

「……………『黒石』」

ロットとルーの喉元から、息を呑む音が聞こえる。

——『黒石』。

日常生活では決して目にできない、レアな色の『石』。その能力は『分断』。つまり、その『石』が触れた部分の分子を——その硬度によらず——すべからく『分断』するのである。その特性から、主に武器に用いられる『石』。もちろんその性質すら不明な『銀石』ほどではないが、それでも『白石』と同じく、一般人には滅多に目にかかれないレアな『石』だ。しかし——

「——『黒石』の刃なんて、所持してるやつはたかが知れてるだろう？」

「ええ。致命傷の傷が『黒石』によるものであること、及びその切り口から、犯人はすでに特定されています」

「誰だ？」

「『闇蛇』^{やみへび}です」

「……………『闇蛇』か。よりもよって……………」

呟きながら、ロットは頬にしわを寄せた。しかしルーは首を傾げ、
「やみへび？ 何それ？」

疑問符を額に浮かべながら言う。ロットはルーの方に視線を移し、
「名の通った殺し屋だ。能力で言うなら、ランキング上位の賞金稼ぎとも遜色ないほどだそうだ。主にこの大陸で活動している。有名どころが殺された事件の、七割方はこいつの仕業だと言われている」
「へ」

呑気に驚くルー。どうにも、その顔に緊迫感は見られない。ロットは息を吐き、表情を崩さないまま、

「……………ルー。お前、『カザミドリ』という集団を知っているか？」
「知らない」

ルーは首を横に振る。

「巷では秘密結社なんて形容されている集団だ。それというのも、数十人ものメンバーが所属しているからだ。そしてこいつらの目的はただ一つ。メンバーの全員が、その一つの目的のためだけに活動している」

「その目的って？」

「『銀石』を手に入れることだ」

キーワードに反応して、ルーの表情がわずかに険しくなる。

「数十人の人間が『銀石』を求めて動いている。まあしかし、大集団とは言え、それをまとめ上げているのはたかだか数人のでだれだ。非合法的な人間達の中で、さらにその上に立つだけの力を持つ者。その中には、かつてギルドでトップテンに入っていたような人物もいるらしい。そして、その『闇蛇』もその『カザミドリ』に誘われたそうだが、しかしその誘いを蹴ったという過去がある」

「蹴った？」

「ああ。まあ、殺し屋を稼業にするような輩は、たいてい一人で行動するものだ。蹴ったことそれ自体は珍しいことではない。驚くべきなのは、蹴った際、勧誘してきたメンバー二人を殺していることだ」

「……殺した」

「うむ。この二人の死体は自警団に確保されたんだが、二人とも、当時のギルドのランキングでそれぞれ四位と十一位に在していた人物だったそうだ」

「そんなことが……あつたんだ」

視線を床に落とし、考え込む顔をするルー。

ロットは『闇蛇』の力量を説明するために『カザミドリ』の例を引いてきたんだろうが、今ルーが考えているのは恐らくその『闇蛇』ではなく、『カザミドリ』についてだろう。自身も『銀石』を探しながらその秘密結社を知らなかったのは寡聞と言わざるを得ないが、しかしそれは秘密結社であり、存在自体公ではないのだ。俺だって

そういう集団が存在するということしか知らない。メンバーが一体誰なのかとか、具体的にどういう活動をしているのかなんて、そんな情報は一切持っていないのだ。

と、横でこの二人の会話を傍観していたギーンが、

「もう一つ、おもしろいことがあります」と言いながら、悪戯っぽい笑みを浮かべた。「一昨日あなた達を看破したという、その殺された盗賊が、実はその『カザミドリ』のメンバーだったという話です」

「……！」

「死体の持ち物の中から、『カザミドリ』のメンバーである証明に使われるコインが見つかったそうです」

「……つまり、その盗賊は『グランドル遺跡』に『銀石』を盗りに来てたというわけか」

「そうなりますね」

頷くギーン。

世間は狭いと言っかなんというか。まあ元々、賞金稼ぎ業界だって閉鎖的なものではあるがね。しかしその『闇蛇』は再度その秘密結社に喧嘩を売るなんて、何を考えてるんだろうか。相手は集団なんだ。目をつけられれば危険極まりないだろうに。逃げ切る自信があるんだろうか？ まあ、仕事のひとつとして割り切ってるようにも見えるが――

「――ん？　じゃあ、その盗賊が盗ってった宝石箱っていうのは、その殺し屋が持っていたのか？」

「いえ、すでに『カザミドリ』に渡ってしまったそうです」

「ちょっと待て。何でそんなことが分かるんだ？　盗賊が宝石箱を持ってたからって、そう断言はできないだろ」

「……これはあくまで推測でしかないそうですが。その盗賊の遺体は急所以外には傷がなく、しかし彼が使っていた『青石』のナイフは刃こぼれが多数あったそうです。加えて、盗賊の所持品には探った形跡がなかった」

「そこから、何で分かるんだ？」

「ご存知の通り、盗賊の武器である『青石』のナイフは、『石』を発動させれば刃は再生します。しかし刃こぼれが残ったまま転がっていたことから、その戦闘で盗賊は『闇蛇』にそれだけ打ち込まれたことが分かります。なのに、盗賊の遺体に残っていたのは急所への一撃のみ。これは、『闇蛇』がその盗賊よりも数段実力が上であったこと、そして戦闘中にその宝石箱を壊してしまわないように、盗賊に余計な攻撃を当てなかったことを示しています」

ギーンはここで一旦言葉を止め、息を吸い込んでから、

「つまり、『闇蛇』はその宝石箱を奪いに来たはず。狙いは『銀石』。しかし、盗賊の荷物は荒らされていなかった。秘密結社に属する人間が、自分から大事なものを差し出すとは考えられない。かといって、大事なものを見つかりやすいところに置いておくはずもないということとは、『闇蛇』は殺す直前に、宝石箱がすでに盗賊の手にあることを知った。盗賊が他の誰かに渡した後であることを知った。恐らく、死ぬ間際に盗賊が、せめてもの抵抗としてそう伝えたのでしよう」

俺は腕を組みながら、

「……うん。筋は通ってるが、推測は推測だろ？」

「ええ。盗賊が思いの外へタレで、命乞いをして宝石箱を差し出した拳句に殺されたという可能性もあることにはありますが。あるいは第三者の介入とか……。しかし一番あり得る状況としてそのように分析して、各国の追っ手はその推測に従って行動をしているそうですよ」

「なるほど……ね」

とりあえずの情報の整理ができ、俺は一応納得する。と、

「ちょっと、ギーン」

カウンターの方から、ウェリイの呼び声。ギーンがそつちを振り向くと、

「こっち来なさい」

ウェリイが手を招いている。

「あ、はい。何、お姉ちゃん？」

呼ばれて、ギーンはそっちに駆けていった。そしてカウンターの紙を指差しながら、二人で何やら話し合っている。その様子から察するに次の仕事を決めているようで、いくつかの候補の中から絞っているところだと思われる。こっちのチームはすんなり次の仕事に移行して行きそうで、ウチとは何と大違いなのかと思わず羨望に駆られていると、

「……ねえ、ロット。その、『カザミドリ』について、詳しく教えてくれない？」

真顔をつくったルーがロットの方を見ながら言った。

「ああ、別に構わないぞ。この秘密結社の存在が噂され始めたのは、三年前の——」

ロットは嬉々と説明を始める。

俺だって『カザミドリ』に関する情報は人並み程度に持っていて、ロットと同じ程度のものだとは思う。しかしこの機会に確認しておくのもいいだろうと思い、その会話に参加しようと二人の方に顔を向けようとした、その時、

「ダルク」

静かな声で後ろから名前を呼ばれた。振り返ると、棒立ちのまま俺に視線を向けるワイト。気配をまったく感じなかった。その青白い顔を見ていると半透明に見えてくるもんだから、彼女に足があることをわざわざ確認して幽霊疑惑を払拭した後に、狼狽を押し殺しながら、

「……な、何？」

「最近……ようやく分かって……きた」

いつもの通りのため息のような口調で言う。

「……分かってきた？」

「何が？」

「あなたが言った……こと」

俺が言った……こと？

いきなりそんなことを言われても、何のことについて言っているのかパツとは思いつかない。

「俺、お前に何か言った——」

しかし俺が尋ね終える前に、ワイトはカウンターの方へ行ってしまった。そしてカウンターで紙を挟んで話し合っているウエリイとギーンを傍観し始めた。

……はて。俺、ワイトに対して、理解に時間がかかるような難しいこと言ったつけ？ ワイトと会話した回数なんてそれほど多くはないはずだが……。

首を右に傾けてみたが、思い当たることはなかった。

結局思考を放棄して、ロットとルーの方に再度顔を向けたが、

「——というわけだ」

ちょうどロットの説明が終わったところだった。……まあ、後でもう一度確認しておくさ。

しかし説明は終わったと言うのに、ルーはテーブルに視線を落としたまま黙り込んでしまった。ひとしきり考え込むくらいの時間が経った後、ふっと顔を上げ、

「ねえ、ロット、ダルク。盗まれた宝石箱って、その『カザミドリ』にあるんだよね」

ルーは神妙な面持ち。このタイミングで、しかもこんな顔をしたルーが次に言ってくることを言えば——

「あたし達で、その結社を追うつてのは？」

「だめだ」

俺は即答した。

思えばこの前盗賊に襲われたのも、アンディさんの言いつけを破って夜中に遺跡に行ったからである。賞金稼ぎの仕事とは関係ないことをした拳句に、あんな危険な目に遭ったのだ。ラキの言う『能力は商品』という論も完全に破っている。おかげで盗賊の進入を確認できたとは言え、俺達は殺されそうになったんだ。殺されかけた

んだ。

俺にとって賞金稼ぎの仕事は、生計を立てるためだけのもの。それ以上でも以下でもない。だから、俺は同じ危険は犯さない。同じ間違いは犯さない。もちろんラキの言うことをそのまま全部信じるほど幼稚な人間でも、単純な性格でもない。しかし賞金稼ぎの仕事を全うする上では、それが正解だということには納得している。

俺はルーを見据え、

「俺達はい昨日、危ない目に遭ったばかりだろ。危険だと言われて、危険な目に遭った。しかも今度は死ぬと言われたんだぞ。お前も少しは学習しろ。危険な仕事に首を突っ込むのは、それ相応の実力をつけてからだ」

「……そうだね。ごめん」と、ルーは視線を地面に落とす。

そのしょんぼりした表情に、ため息がこぼれてしまう。

「俺だって、仕事ならばやれと言われればやるさ。しかし『カザミドリ』に接触するとか、そんなレベルの高いことはできないし、第一請け負えないだろう。マスターに止められるのは目に見えている。だからもっと危険度の低い仕事——例えば『カザミドリ』について調べるだけとか——が来た場合なら、受けてもいいとは思っている」

「……そっか」

ルーは弱々しく微笑んだ。

第十一話

「ただいまあ」

と言いながら我が家の玄関を開けると、廊下の奥から

「お帰りなさい、ダルク」

聞きなれたラキの返事。そして——料理中なんだろう——キッチンのドアからひよいと廊下に顔を覗かせてきて、

「今日は早かったですね」

「そうそう毎日遅くまで仕事なんてしてらんないよ」

俺は社会に出て数十年経った大人のようなセリフをこぼしつつ、嘆息しながら廊下を進む。

リビングに入ると、夕飯はできてなかった。まだ夕食には一時間くらい早い時刻であるが、しかしいつもならサラダくらいは並んでいるものである。別にサラダだけをつまみ食いする気はないけど。

腹時計と相談し、間食はしないでおこうと思っていると、ラキがパタパタとリビングに入ってきた。

「ごめんなさい、今日は帰るのが遅くなって、まだできてないんですよ。夕飯は少し遅くなります」

「ああ、別に構わないよ」

そう答えながら俺は椅子に腰掛け、夕刊に手を伸ばした。

そのまま再度台所に戻るのかと思ったラキは、しかし胸元のポケットから眼鏡を取り出して掛けると、そのまま部屋の隅の棚へと寄っていった。そして棚の引き出しから封筒を数枚取り出し——何か目当てのものを探しているのだろう——それらの封筒の宛名を凝視し始めた。

ラキは封筒を一枚一枚ひっくり返しながら、声だけで俺に話しかけてきて、

「ダルク、次の仕事は決まったんですか？」

「いや。当分は決まらなさそう」

「そうですか。じゃあ、しばらくはダルクの夕飯も用意しなければなりませんね。もしこの前みたくいらなくなったら、せめて前日までに言ってくださいよ?」

「分かってるよ」

言いながら、俺は新聞をめくる。

と、

「あ、これです、これです」

ラキは束から一枚の封筒を取り出した。そして「はい、どうぞ」と言いながら、俺に封筒を差し出してくる。

俺はそれを受け取りつつ、

「何これ?」

「ふふ。読めば分かりますよ」

俺は封筒を破き、中身を取り出した。出てきたのは、見たこともない黒ひげを生やしたおっさんの顔写真。斜め上を睨んだ顔のどアップが写っている。

誰だこの人と首をかしげていると、

「一つ、良いことを教えてあげましょう」

「何?」

「――現実というのは、他のすべてが信じられなくなってから疑うべきものなんですよ」

「……何それ? どういう意味?」

俺の疑問に、ラキはやたら嬉しそうな顔をして、

「それ以上は自分で考えてください」

第十二話

盗賊が殺されたことを知らされて三日目。状況が動き出した。

その日は雨だった。

朝からしんと鳴り続く雨音。とつくに日の出の時間は過ぎるはずのに、街は不気味に薄暗い。十六年住み着いている街とは思えないほどの印象の変化だ。このおどろおどろしい情景のせいなのか、それとも気圧が低いせいなのか知らないが、寝起きからどうにも肩が重い。やたらと気だるい。

傘を差してトボトボと一人で通い慣れた道を歩み、このアンニユイな気分にもしやと思いつながらギルドにたどり着くと、案の定、ロツトが俺よりも先に来ていた。ルーよりも先にこいつの顔を見る朝は、一体何ヶ月ぶりだろうか。

しかしそれよりも驚いたのが、ギルド内にやたら人が多かったことだ。

傘を丸めながら見回してみたが、少なくとも十人以上の人間がこの建物内に集まっている。このギルドに登録している賞金稼ぎ全員が集まっているというわけではないだろうが、それでも今まで見たことがないくらいの人数だ。一人一人顔を確認して見ると、アンディさんやポーラさんまでいる。

アンディさんが俺の視線に気付き、笑顔と共に軽く手を振ってくれた。なのでこっちも会釈で返す。

人ごみの中をぬってロツトとルーの方へ行き、

「どういうことだ、これは？」

と朝の挨拶よりも先にロツトに尋ねると、

「このギルドの賞金稼ぎ、集まれるものはみな集合ということらしい」

「……何でまた？」

「やつらの隠れ家の一つが発見されたそうだ」

「やつら？」

「『カザミドリ』だ」

シニカルな笑みを浮かべながら、ロットが答えた。

俺は首をひねりつつ、

「『カザミドリ』の隠れ家が見つかったからって、何でこんなに賞金稼ぎを集めるんだよ？」

「その説明はそろそろ始まるだろう」

言いながら、ロットはカウンターの方を顎で示した。

そっちへ視線を動かすと、黒服、黒ぶち眼鏡に黒いロングヘアという、この前見たときと同じ格好のままのリンクさんが、カウンターのそばに独り佇んでいた。

俺が注視している中、リンクさんはちらつと壁に掛かっている時計を見上げて立ち上がり、背筋を伸ばして口を開いた。

「では、皆さんに今日集まってもらった件について、説明させてもらいます」

その発言に反応し、ギルド内の人間全員がリンクさんの方に向き直る。皆が押し黙り、建物内はいきなり静寂に包まれた。

しかしリンクさんは、急に变化したギルドの雰囲気を感じることなく、静かに息を吸い込み、そして語気を強めて、

「これから、あなた方全員で共同戦線を張って頂きます」

第十三話

俺達は現在、崖の中程に立っている。

直角に切り立った岩肌に、少しだけ突き出したスペース。五人が集まるには少々心もとない広さだが、岩盤はしっかりしていて、崩れる心配はなさそうだ。

後方には溪流がごうごう流れており、そして眼前には大きな扉。平屋が一戸通り抜けそうなくらい、なかなか大きな金属製のものである。しっかりと閉まっていて、水の音を反響させている。

森の獣道を通り、知らなければ見逃してしまいそうな小さな坂道を通って、二十分ほど前に俺達はここにたどり着いた。雨のせいでぬかるんではいたが、それでも雑草はまったく生えておらず、ここが通路であるということはわかった。やつらも、ちよくちよくここを使っているのだろう。

この扉は、いわゆる裏口。『カザミドリ』の第十三部隊が根城に使っている館のような建物の、隠し通路のような場所である。

そして俺達はここで息を潜め、作戦のリーダーであるリンクさんの合図を待っている。

作戦は簡単。正面から十四名が突入し、敵の戦力がそこに集まった瞬間に裏口から残り五人が突撃する。そしてこの五人が、敵の大將を狙うのである。

俺達は、この五人に含まれている。

もちろん、裏口からの突撃はこの作戦の要。成功の鍵を握っており、俺達のような経験の少ない賞金稼ぎがそんな責任ある役職を与えられるわけではない。俺達——俺、ルー、ロット——は、ただのサポートだ。敵の大將の首を獲ることを義務付けられた他の二名の賞金稼ぎが、行くべき部屋にたどり着けるように援護するのである。そしてこの二名の賞金稼ぎとは、アンディさんとポーラさんのことだ。

当初、リンクさんの予定の中では、この二人のサポートは別の人
が割り当てられていた。俺達よりも数倍経験と実績を備えた、二名
の賞金稼ぎである。しかし直前になって、アンディさんが俺達を推
した。理由は、この前組んだばかりでやりやすいからだそうだ。

リンクさんは最初は渋っていたが、結局それに同意した。俺とル
ーはともかく、ロットの腕はギルドでもそれなりに評価されている
のである。ポーラさんにもどうにか同意を取り付け、最終的に俺達
に決定した。

いきなりこんな大役を背負わされて逆に俺が不満だったが、ロッ
トもルーもやる気だったので、言わないことにした。まあ、これは
仕事の内だし、大物二人が側にいればむしろ安全だと考えられなく
もない。

小雨に打たれながら、ポーラさんが握るトランシーバーを五人で
凝視している最中、ふいにアンディさんがぽんと俺の肩を叩いて、

「お前は地下を目指せ」

と小声で言ってきた。

この館の中の造りは現在不明で、この作戦は半ばぶつつけ的だと
リンクさんが朝の説明で言っていた。見取り図を手に入れてからの
方が作戦の確実性、安全性は向上するが、その間に逃げられてしま
う危険性もある。この館に隠れている『カザミドリ』のメンバーは、
恐らく十人弱。その倍の人数を用意していれば、地の利は向こうに
あるうともそれほど被害も被らないだろうというわけで、この強行
軍になったそうだ。

しかし今のアンディさんの口調は、まるで館の内部を知っている
かのような口調。もしかして何か情報を得ているのかと尋ねようと
したとき、

「第二部隊、突撃開始！」

トランシーバーからリンクさんの掛け声。それを機に、アンディ
さんが門を蹴り開け、残りの三人も続いた。

俺も慌てて、その後を追った。

溪流の音を背中に聞きながら、俺達は回廊を進んでいく。

赤黒い絨毯に、壁には絵画が飾ってある洋館のような造り。柱の上の方に取り付けられた『赤石』の灯りで室内は照らされている。しかしこの灯りはこの広さに十分とは言えず、しかも外からの光はまったく入ってきていない。辺り一面不気味な薄暗さを保っている。

視線を前に向けたが、奥は見えない。光が足りないせいもあるだろうが、それ以上にこの回廊が長い。ついさっきこの館の脇を通って裏口に行ったんだからその広さは大体分かっているつもりだったが、中に入ると余計に広く感じる。この敷地をくまなく探してたんじゃ、いくら時間があっても足りないだろう。

ルーの息が切れるくらいの距離を走ったところで、目の前に壁が現れた。しかしこれは行き止まりと言うわけではなく、Ｔ字路。分かれ道だ。

紺色のコートをたなびかせながら走っているポーラさんが、息を乱すこともなく、

「アンディ、どっちに行く？」

「守りたいもんは城の真ん中に置いておくもんだ。十中八九、左が正解だろ」

「二手に分かれる？」

「いや。逆に危険だし、しばらくは止めとこう」

「オーケー」

それだけのやりとりでもって、進路を決定。前に行くアンディさんとポーラさんが左に曲がった、その瞬間、

「死ねえっ！」

叫び声と共に、甲冑を着けた男が切りかかってきた。

しかしアンディさんは驚く様子もなく、腰からサーベルを抜き男を切りつける。男は壁に打ちつけられ、そのまま動かなくなった。

「どうやら主戦力は表口の方に行っちゃったみたいだな」

呟きながら、スピードを緩めることもなくアンディさんは走り続ける。

……俺達がサポートすることなんてないんじゃないか？

その後も二人ほど敵が襲ってきたが、アンディさんのサーベル及びポーラさんの鎌で弾き飛ばされ、一瞬でお役御免となった。俺達三人は走るだけで、何もしていない。

楽なのは良いが、存在意義まで疑われるのも考え物だなと思って
いると、目の前に木製の扉が現れた。

ポーラさんが取っ手に手をかけたが、ガチャツという太い金属音。
明らかに鍵が閉まっている。アンディさんが再度蹴り破ろうと、足を上げた瞬間、

ドバツという音が天井からした。

見上げると、ちょうど俺の真上に水。そのまま落下してきて、俺に降りかかってくる。慌てて俺は頭を腕で庇う。

結構な水量だ。水圧で動けない。何とか立ち上がろうと足に力を
挙げた瞬間、動いたのは俺の上体ではなく、床。メキツという音が
したかと思うと、足からの反動が感じられなくなり、直後浮遊感。
水しぶきの音に混じって「ダルク！」という声を聞きながら、

俺は階下に落ちていった。

第十四話

空中に投げ出されて刹那の後、下に見えたのは木目。

着地する直前、膝の屈伸で衝撃を弱めようとしたが、半ば失敗。

腱は傷めてないだろうが、痺れがふくらはぎを襲う。俺は耐え切れず床に手をついた。そして体勢を立て直そうと腕に力を入れた瞬間、目の前に大きな影が現れた。

体中——顔や手の甲まで——青白い甲冑を纏った大男。その内側は筋肉なのか脂肪なのかわからないが、しかし体積と重量は俺の五倍以上あることは確かだ。肩に乗せた砲台を、俺に向けている。

「ちっ、ガキか。……まあいい」

太い声でそう言いながら、砲台の裏側で何かをいじくっている。ガチツという音が聞こえたかと思うと、砲台の筒が赤く染まり始めた。

「その色は……『赤石』！」

「ひゃっひゃっ。ご名答」

大口を開けて笑う大男。

……これは恐らく『赤石』の火力を増幅させ、火炎を放射させる類の大砲だろう。何て物騒なもん持ってやがる……。

俺は横に避けようと体重を傾けた。が、足が動かない。上体だけが倒れる。足元を見ると、俺の脚は床ごと白い塊に覆われていた。

これは………氷？

「ひゃっひゃ。ばーか。お前は畏にかかってんだよ」

………畏？

床を良く見ていると、そこだけ青かった。これは………『青石』！

………そうか！ 水圧で地下に落とし、そこに『青石』を仕掛けておく。すると、落ちてきた敵が床に着いた瞬間、その衝撃で『青石』が発動。床が冷気を発する。その冷気により水は凍り、敵は動けな

る、と。そういう罠か！

「ひゃっひゃ。安心しろよ。このバズーカはな、火力を貯めるまであと一分かかる。その間に言い残したことはしゃべれるぜ」

俺に向かつて砲台を構えながら、大男が言う。言ってる間にも、砲筒はみるみる赤く染まっていく。

俺は慌てて腰のホルダーから『ムゲン』を取り出し、足の氷を叩いた。が、思いの外氷は硬い。鈍い音と共に破片の粒が飛ぶ程度。二度、三度、四度と打ちつけてみたが、やはり同じだ。割れる気配はない。数十回叩いてみたところで、到底割れるとは思えない。

「あと四十びょう」

気持ちよさそうに腹の底から声を出す大男。……くそつ、気持ち悪いくらいにニヤけてやがる。

氷を叩き割るのを諦め、背中に手を回したその時、

——カッソッ

館内に甲高い音が響いた。

「あん？」

と斜め後ろを振り返る大男の視線の先、白い影が飛び交い、俺の目の前に降り立った。ダボダボのパーカーに白いショートヘアの後姿が、俺に目の前に現れる。

「……！ ホワイト！」

俺が叫ぶと、ホワイトは首だけでこっちを振り返った。

その向こう、大男が顔をこっちに戻し、

「何だ、仲間か？ しかもまた子供たあな。……まあいい。お嬢ちゃん、そこを動くなよ？」 今丸焦げにしてあげるからね」

俺はそんな間の抜けた声を無視して、

「助けに来てくれたのか！ 悪い！ 今ちよつとヤバイんだ！ 早くあいつを——」

しかしホワイトは俺を見つめたまま、動こうとしない。

「な、何してんだよ！ 早くあいつをどうにかしてくれ！」

「……残念ながら……私には……あいつを一撃で……行動不能に陥

らせるすべは……ない」

……確かに、あの鎧を纏った巨漢相手に、ワイトの細腕で致命傷を簡単に与えられるとは思えない。大砲を壊しにかかるのも、暴発の可能性があり逆に危険だ。危険だが――

「――じゃあ、どうするんだよ!」

「……私が……あいつの一撃を……受ける。……その衝撃で……その氷も砕け散るはず。……だから……その後……あなたがあいつを仕留めれば……良い」

「何冗談言ってんだ! そんなことしたら、お前が無事じゃ済まないだろ!」

「……他に……手はない」

「いいから、ロットでもルーでも、誰か呼びに行ってくれ!」

――ワイトがいなくなれば、その間に……。

「……それじゃ……間に合わない」

「だ、だからって、何でお前が俺を命がけで庇うんだよ! ウェリイならともかく、俺に対してそんな義理はねえだろ!」

「あなたも、私を救ってくれた……ひと」

へ? 俺……も?

ワイトは俺の目を真っ直ぐ見据えたまま、言葉を続ける。

「……私のこの左手を見た時……人は皆……奇異な目をする。……冷たい目をする。……ウェリイでさえ……例外では……なかった。

……怯えたような表情を……していた。……ギーンも……ロットも……ルーも……そうだった。……しかし……しかしあなたは違った。

……あなたは……私のこの左手を見て……………………笑ってくれた」

……言われて俺は、ワイトの左手のクローを初めて見たときを思い出してみる。あれは確か、山の中。俺が獣に襲われた時だ。俺に牙を向けてきた虎のような、熊のようなそいつを、俺を庇うようにしてワイトが退けてくれた。その獣にワイトが『ツバメ』で切りつけた際、袖口から腕と『白石』の結合部が覗いた。それを見せられ

たとき、確かに俺は――

――笑った。

恐怖など微塵もなく、畏怖など欠片もなく、ただただ、おもしろかったから、興味深かったから、笑った。笑ってしまった。しかし――

「――べ、別にそれは、良心とか思いやりとかそんなんじゃない、ただ、俺はお前と同類だから――」

「……あなたの意思是……関係ない。……どちらにしろ……私が……私の心が救われたのは………事実」

「だ、だからって、命を懸けるほどのことなのかよ！」

「……私は……何も持たずに生まれてきて……生きることだけを考えて……生きていた。……他の何を望む余裕も……なかった。……望む自由が……なかった。………だけど他の人は……私を自由だと言った。……何にも縛られずに生きている私を……自由だと言った。……私は自由なのか……自由ではないのか………分からなくなった。……私は幸せなのか……不幸なのか………分からなくなった。……自由が幸せなのか………分からなくなった」

――な、何を言って……

「………けどあの時………あなたは自由は『選ぶこと』だと………言った。………最初はその意味が………分からなかった。………持っているか持っていないか………あるかないか………じゃない。………気付けば簡単なことだった。………選ぶことが………幸せ。………選ぶ自由があることが………幸せ。………そういうこと。………そしてようやく分かった。………私は………ウェリイを守る自由があつて………幸せだった。

………私に………あなたを守る自由があつて………幸せ」

そしてワイトは口元を緩め、目元をほころばせ、瞳に光を宿らせ、ほんの少しだけ、ほんの少しだけ微笑んだ――…微笑んだように見えた。

俺はただ、その表情を呆然と見つめる。

……………何だよ、これ？

分からない、分からない、分からない、分からない、分からない。何で？ 何で、俺のために、俺なんかのために命を賭ける？

熱いの、痛いのに、苦しいのに——死んでしまうのに。

俺が笑ったのは、ただの偶然。あの言葉も、考えあつてのことじゃない。

なのに、なぜ？ なぜ？ なぜ？ なぜ？

なぜ微笑む？

この場所で、このタイミングで。

分からない、分からない、分からない、分からない、分からない。ワイトの言うことが分からない。

ワイトの思う意味が分からない。

ワイトの心内が——分からない。

「じつかんぎれー」

大男の声が響き、すっかり灼熱色に染まった砲台が熱気を放っている。大男と俺は十数メートル離れているのに——間にワイトが立っているのに——ここでも熱を感じる。あんなのをまともに食らったら、骨も残らないだろう。何か防御壁がなければ。

……確かに、このままでは——この状態のままでは、これが最良の手段。ワイトが傷つき、俺が自由になり、そして俺がこいつを倒す。これが俺にとって最良の手段。俺に損害はない。俺は無事に生き残る。傷つくのは……ワイトだけ。

ラキの教えにのつとれば——『能力は商品』と割り切れば——俺がここで『能力』を振るうのは、間違い。金にならないのに部外者に『能力』を見せるのは、間違い。他に手があるのに『能力』を使うのは、間違い。間違いにしかない。

だけど、本当に？ 本当にこの状態が正解なのか？

ラキの言葉を、反芻する。

『もし頑張りすぎれば、最終的には、すべてを敵に回してしまいま

すよ』

………そうか。つまり、そういうことだろ？

すべてを敵に回すなら、回す覚悟があるなら、『能力』を自分のために使っても良いんだろ？　そうだろ？　そういうことだろ？

「いづくぞ」

砲台の怒号と共に、炎の円柱が俺達に向かってくる。とんでもなく大きい円柱。回廊の端から端まで覆っている。逃げ場なんてない。俺は『ムゲン』を放り投げ、左手で目の前のワイトのパーカーの背中を力いっぱい引っ張った。驚いた顔で俺の肩にぶつかってくるワイト。そのまま左腕でワイトを抱える。そして俺は右手を背中の中に入れた。掴んだのはナイフの柄。そこから取り出したのは

——黒いナイフ。

「あなた、それ……」

轟音の中微かに聞こえたワイトの声を無視し、俺はこちらに向かってくる炎柱に対して、この黒い刃を振り下ろした。目の前で炎が真っ二つに割れる。左右を炎が通り過ぎていく。熱気が頬に伝わってくる。しかし耐えられないほどではない。髪が少し焦げているかもしれないが、知ったこっちゃない。

刹那で炎は過ぎ去った。

俺はワイトの肩を離し、黒い刃で足元の氷に触れる。手ごたえもなく、氷は分裂した。すねやふくらはぎにはまだ氷がついているが、後回し。そのまま俺は立ち上がる。

目の前には、驚いた大男の顔。

「お、お前なんで……その黒いナイフ……まさか……」

俺はナイフをかざし、少しずつ大男に距離を詰めていく。

「レ、レーガー様に知らせなくちゃ——」

その巨漢を回れ右させて、駆け出そうとする大男。俺はその後を

追おうと前かがみになった、その瞬間、

大男の足元で、紫色の霧が発生した。

「うおっ！」

大男は横っ飛びでそれを避ける。と、

「火炎斬鉄！」

掛け声と共に、大男の肩の上に炎が走った。大男は倒れながらこれを何とかかわした。

「だ、誰だ！」

という大男の叫び声に応えるように、暗闇から二つの影が灯りの下に現れ、そこにいたのは言うまでもなく

ロットとルーだった。

……このタイミングで登場とは、分かっているような分かっていないような。しかし、これがこいつらしいと言えばこいつらしい。

「ダルク！ 大丈夫？」

「やれやれ、心配させて」

そう叫ぶ二人に、

「悪い悪い」

そう言いながら、俺はさり気なさを装って『黒石』のナイフを背中ホルダーにしまった。その際、後ろを振り返ってワイトに目配せをしておく。ワイトは驚きを隠せない表情のまま、顎だけ縦に動かし

「おのれ」

向かおうとしていた方向を二人に止められた大男は、方向転換し、こっちに向かって走ってきた。

「どけどけ」

叫びながら砲筒を振り回す。俺は横に飛んでそれを避けた。ワイトも立ち上がり、ひらりとかわす。

「待て」

「逃がすか！」

ロットとルーがそれを追いかけて行き、三つの後ろ姿はすぐに見えなくなってしまった。

一気に緊張から開放され、思わずため息がこぼれる。そしてさっき放り投げた『ムゲン』を拾い上げて、腰のホルダーにしまった。

「ワイト、大丈夫か？」

振り返りながら声をかけてみると、

「……大丈夫」

ワイトはパーカーの砂を払いながら答えた。そしてすくつと立ち上がり、

「……それより、ダルク。……さっきのナイフ——」

「後で説明する。誰にも言わないでくれ」

俺はワイトの言葉を遮ってそう答え、暗闇の奥、大男が行こうとした方向へ歩を進めた。

第十五話

階段を一つ降りてレンガ造りの地下廊を進み、目の前に現れたのは木製の扉。取っ手を回すとあっけなく開いた。

扉の奥、眼前に広がったのは三方を本棚に囲まれた書斎のような部屋。壁に一ヶ所だけついている灯りに照らされている。そしてその向こう、椅子からゆっくりと立ち上がった影があった。その人物を良く見ると、それは

アンディさんだった。

Tシャツにハーフパンツ、茶髪にバンダナというさつき見た格好のままのアンディさんが、俺に向かって笑いかけている。

「くはは。まさかお前がここまで来るとはよ」

茶化したような声音。俺は警戒しながら、

「……どういうことです？」

「どうもこうもねえだろ。くははは。これが現実だ。俺が、あの遺跡からお宝を盗み出した黒幕ってことだ」

……つまりアンディさんは、賞金稼ぎとして遺跡調査を請負うと見せておいて、裏で『カザミドリ』としてその宝を横取りしようと企ててたってことなのか？ 確かにそれなら、ああもタイミングよく盗賊があつた遺跡に入つたことに説明がつく。アンディさんがその隠し扉を確認し、プロの調査隊が入る前に盗賊を呼んだ、ということなのか。それならば賞金稼ぎとしての面目を保ちつつ、裏で『カザミドリ』の職務も遂行できる。

確かに、筋が通っている——筋が、通っている？

「しかし、これも仕事だ。お前には死んでもらわなきゃな」

言いながら、アンディさんは腰の鞘からサーベルを抜いた。そして俺に向かってその剣先を向ける。

「まさかランキング上位である俺に勝てるなんて思ってたねえよな？
くはは。無駄な抵抗は止めて、潔く死んでくれ」

俺に対し右肩を向けた、まるで左腕を庇うような半身の状態でサ
ーベルを構えている。そして一歩二歩と、間合いを詰めてくる。

「くはは。知ってるぜえ、お前の弱点。右目の視力が極端に悪いん
だろ？ 右側からの攻撃に対して、どうしてもタイムラグが出来ち
まうんだろ？ くはは。難儀なもんだな。」

——なあ、『闇蛇』？」

その言葉と同時に、剣先が俺の顔面目掛けて飛んでくる。明らか
に俺の右目を狙った攻撃。俺は首を倒し、それをかわす。

耳元で風が唸る。相当なスピードだ。予想以上の攻撃に、バラン
スが崩れる。俺は慌ててアンディさんと距離をとった。

……確かに、『闇蛇』のウィークポイントに関してはそれが正解
だ。あいつは左目は普通なのに、右目だけが異常に遠視なのだ。だ
から、文字を読む際は眼鏡を着用している。それは正しい。正解で
はある、が——

——俺が『闇蛇』？

何だ、この壮大な勘違いは？

俺も『闇蛇』も『黒石』の武器を扱ってはいはいるが、相似点はそ
れだけだ。あいつは刀で、俺はナイフ。武器は全然違う。能力も全
然違う。何だ、この間違いは？

考えてみれば、アンディさんに関しても不自然な点がある。

まず遺跡調査をした初日、隠し扉を発見した直後に俺達を解雇し
た。もし夜に盗賊を遺跡に招く予定だったと言うなら、俺達をその
日一日は監視しておくべきだったんじゃないか？ 俺達を自由にす
るのは、最良の選択ではなかったんじゃないか？

加えてそのタイミングの悪さについては、あの時アンディさん自
身が俺達に説明したんだ。あれは、俺達にアンディさんを疑う材料

を与えただけじゃないのか？ これも最良とは言えないんじゃないか？

………そうか。ラキが言っていたのは、そういうことだったのか。

『現実とは、すべてを疑った後に疑うもの』

矛盾点が存在するなら、現実を疑ってしまうのはまだ早い。あり得ない現実を信じてしまうのは、まだ早い。

敵は距離を詰め、俺に向かってサーベルを突き出してきた。またも右目を狙っている。俺はタイミングを合わせ、これをかわす。相変わらず相当な突きのスピードだが、右目が不自由ではない俺は、これをかわしきる。間一髪、肩をかすっただけだ。

俺はそのまま前に踏み込む。そして敵が庇うようにしている左手を、『黒石』のナイフで切りつけた。………そこが怪しかった。

パリンッ

ガラスが割れるような音がした。リーチが足りず、俺のナイフは敵の手首の上を通っただけのはずだが……。

再度距離をとりながら、一体何が割れたのか確認しようと足元を見る。そこに広がっていた破片は、橙色——橙色の『石』。発動すると幻覚を見せる霧を放つ、『橙石』の破片。

「なぜ？」などと考える間もなく、その破片から目線を上げる。目の前、橙色の薄いモヤの中、さっきまでアンディさんが立っていた場所にはまったくの別人が立っていた。

長髪を後ろで縛り、軍服に身を包んだ男。彼は——三日前、ラキに渡された写真に写っていた人物。

そいつは驚いた顔で、

「お、お前、なぜ見破——」

しかし俺はその言葉の途中で、敵の胸を目掛けてラキから貰い受けた武器、『黒石』のナイフ『ゼロ』を振る。

だが、敵の胸は分断されることはなかった。敵は鮮やかに後ろに飛び、これをかわしていた。動揺していたはずだが、やはり『カザ

ミドリ』の幹部。その程度の間では致命傷は与えられない。しかし

「な？ ……あ、あ」

着地した敵はうめくように言いながら、自分の肩を押さえている。その肩の下に、さっきまであったものがなくなっていた。胴は分かれなかったが、敵の左腕は完全に分断されていた。かわしきれなかったんだ。

敵はよろめきながらも、俺を睨みつける。そして

「……く、おのれ！」

叫びながら、そいつ——『カザミドリ』第十三支部長、マーレツト「レーガー」——は、後ろ向きに駆け出し、扉を蹴り開けて走り去った。俺も慌ててその後を追う。

——走りながら、ようやく理解した。

ラキとアンディさんはグルだ。

この『カザミドリ』の根城を潰すために、二人は協力した。そして、実質の行動者として、俺をここに送り込んだんだ。アンディさんがラキと知り合いなもの、つまり二人は仕事仲間ということだろう。

賞金稼ぎが殺し屋と手を結ぶなんて、本来はあり得ないこと。心証が悪くなるし、危険な事柄に巻き込まれることが多くなる。場合によっては危険人物とみなされ、解雇されることもある。普通の賞金稼ぎは——例えばランキング上位だとしても——出来るだけ避けるもの。しかし、アンディさんはあえて踏み込んでいる。

ようやく分かった。アンディさんの恐るべき面。あの人はそういう人だったんだ。

一分ほど走った果て、鉄の扉を開けると、そこは外への出口。眼下は溪流だった。

朝から降り続けている雨のせいで、流れは思いの外早い。とても

人間が泳げるような流れではない。まして片腕では……。

辺りを見回してみるが、人影はどこにも見えない。人が隠れられるような場所も見当たらなかった。ということは、敵の行方は——必然的にそうなるだろう。

きちんと確認すべきではあるだろうが、俺は本職ではない。手抜きと言われても構わない。そこまでの義理はない。

結局レーガーが俺のことを『闇蛇』と誤解した理由は分からずじまいだったが、大体の察しはつく。大方、覗き窓か何かから俺が『ゼロ』を使った様子を見ていたんだろう。もしくは、さっきの大男から報告を受けていたか。まあ、今となってはどうでもいいことだ。俺は、そのままそこを離れた。

ちなみに、この川の下流でレーガーの遺体が発見され、溺死ではあるが間接的には『黒石』の刃による傷が大元の原因であり、その切り口の形状が『闇蛇』のものと違うことから、その犯人が『闇鳥』と呼ばれるようになるのは、これのさらに一カ月後のことである。

エピローグ

結局のところ、『グランドエル遺跡』から持ち出された宝石箱は、館の三階の倉庫を探索していたポーラさんによって発見された。

しかし、その中身は『白石』だった。

重宝される『石』ではあるが、『銀石』とはその希少価値が格段に違う。確かに目に触れることは少ないが、決してゼロではない。架空ではなく、存在はするものである。

俺達がそれを知らされた時、ルーは少ばかり意気消沈していたようだった——が、夕飯を食べる頃には元通り、俺の皿からエビフライを強奪してあるうことか一口で食いやがり、満面の笑みを俺に向けてきた。そうだった、こいつはこういうキャラだ。心配するだけ損だろう。

俺が殺されかけたあの青白甲冑大男というと、ロットとルーに館中を追い掛け回された挙句に、アンディさん（本物）によって成敗。詳しくは聞いてないが、まあ、口が聞けない状態であの屋敷から出されたようで、余計な心配はしなくていいだろうな。

今回唯一の誤算であったワイト。初めて彼女の微笑や驚く顔なんてもものを見たわけだが、仕事が終わった後にはいつものポーカーフェイスに戻っていた。『ゼロ』を見せてしまった以上そのうち説明しなければならぬだろうが、仕方ないことだ。彼女は俺と同類ではあるし、何とかなるだろう。

そして俺が帰路についたのは九時過ぎ。

「ただいまあ」

と言いなながらウチの玄関を開けると、家の中は真っ暗だった。

ラクがこの時間に寝てるなんてことは考えられないし、恐らく今日は遠いところに仕事に行ってるんだろうと思いつながらリビングに入ると、テーブルの上に、朝にはなかった書置きがあった。

『しばらくこの町を離れます。申し訳ないですが、当分は帰れませ

ん。家事は自分でやってくださいな。　ラキ」

紙の裏を見ると、掃除や洗濯、料理における注意点みたいなことがこまごまと書かれていて、分らないことがあつたら隣の家のおばさんに聞くように、という文で結ばれていた。

やれやれ——と思う。

必要以上に目立たないようにしても——『能力は商品』と言い聞かせ、『能力』を振るう場所を限定しても——やはり秀でた能力は、否応なく敵を作ってしまう。ラキの両親が殺された理由、そして俺の両親が逃げるように世界各地を転々としている理由も、またそれによるものだ。だからこそラキは人一倍気をつけていたわけだが、それでもやはり同じ道を歩む羽目になっている。

しかし、『カザミドリ』の幹部ですら殺せなかったラキだ。そう簡単には死にやしない。『闇蛇』たるラキが死ぬなんて、とうてい考えられない。イメージできない。ラキは当分どこかで生き続けるだろう——そして、機会があればまた遭うこともあるだろう。俺はそう確信している。

運がいいのか悪いのか、俺には秀でた能力というのがない。

この五年でラキから様々な技術を習ってはいたが、飲み込みの早さも技の精度も——年季の差を考慮したところで——ラキの足元にも及ばなかった。なので、当分は敵がどうこうという心配はないだろう。

しかし、先のことはわからない。

どう状況が転ぶかはわからない。

俺の運命もこうなるのだろうか？　何年か後、同じようにこの町を出ることになるのだろうか？　逃げ回ることになるのだろうか？

……まあ、それもいいだろう。俺は俺なりにやっていくさ。

紙を握り締め、自然に笑みがこぼれた。

闇鳥のトビカタ
E
N
D

エピローグ（後書き）

あとがき

というわけで「闇鳥のトビカタ」でした。ご愛読ありがとうございました。

本作は式織が初めてプロットなるものを立ててから書き始めたもので、比較的伏線が張りやすかった作品です。なので、重箱の隅をつつくような読み方をされる方はともかくとして、そうでない方はもう一周読んでみるとまたおもしろいのではないのでしょうか。

文庫本のフォームで書いたものをそのままコピペしただけなので、ネット小説のレイアウトとして読みやすいのかどうかちょっと疑問だったりもします。しかし縦書き表示もあるし、というわけで何も変えてないんですが。

本作ではルビは使ってなかったんですが、傍点がすべて消えてしまっているのが残念です。何か方法はあるんですかね？ 今さらですが、調べてみます。

読んでいただければ分かる通り、本作ではまだ回収されてない伏線がいくつも残ってます。続編「闇鳥のウタイカタ（仮）」の構想は漠然とありますが、全然煮詰まってないので時間は掛かると思います。

機会がありましたら、またお付き合いください。

ではでは、ありがとうございました。

式
織
檻

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5589c/>

闇鳥のトビカタ

2010年10月8日15時03分発行